

南北アメリカ研究と文化地理学

— 3つの経済文化地域の設定と地域変化に関する試論 —

矢ヶ崎典隆

東京学芸大学 地理学研究室

本論文は南北アメリカ地誌を文化地理学の視点と方法で検討する試論であり、新大陸と呼ばれてきた広大な地域を考察するための枠組みを提示することを目的とする。アメリカ合衆国における地理学の研究動向および南北アメリカを対象とした文化地理学研究の成果を概観し、4つの研究のアプローチ、すなわち人間と環境、起源と伝播、地域と景観、時間と変化が重要であることを指摘した。このような認識に基づいて、コロンブス以降の南北アメリカを概観するために、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域、プランテーション経済文化地域、イベリア系牧畜経済文化地域の設定を試みた。そして、アメリカ合衆国の発展は北西ヨーロッパ系小農経済文化地域が国土の全域に拡大するプロセスであることを指摘するとともに、具体例としてグレートプレーンズ、南カリフォルニア、カリフォルニア・セントラルバレーにおける地域変化の概要を示した。さらに、3つの経済文化地域の設定は南北アメリカにおける日系社会の比較研究に有効であることを論じた。

キーワード：南北アメリカ、地域研究、文化地理学、経済文化地域、日系移民

I はじめに

地理学にとって地域とはいかなるものなのであろうか。地表面を記述するのが地理学であると長い間言われ続けてきたが、科学技術の発達と情報化の進展、地理学を取り巻く社会の変化、自然科学や人文社会科学の動向を反映して、学術領域としての地理学は変化し続けてきた。地理学が細分化・専門化・多様化の道を歩み続けるにつれて、地理学にとっての地域はますます不明瞭になり、共通理解の得られない存在になりつつあるように感じる。地理学は総合の科学であると漠然と認識され、地誌の重要性が繰り返し唱えられる一方で、地理学は現実の地域から遊離し、地域離れを起こしているように見える。ところが、人、物、情報、資本などの交流が活発化して世界はますます複雑化し、地域をめぐるさまざまな問題が顕在化している。地域をバランスよく正確に認識し、地域が抱える問題を地域の枠組みで考察することが現代世界の重要な課題である。このような状況におい

て、地理学が地域の問題に積極的に取り組むことが望まれる。

地域とその諸問題について考える機会を与えてくれるのが外国に関する地域研究である。地域研究には地理学をはじめとする多くの分野がかかわっており、多様な関心とアプローチがみられる(藤原, 1997; 村山, 2003)。地域研究は本質的に学際的であり、さまざまなアプローチや課題設定が可能であるが、地理学はフィールドワークに基づく野外科学であり、他の社会科学が提示してくれる政治経済構造に関する理解と、人文科学が提示してくれる文化的な理解の間に存在するギャップを埋める役割を果たすことができる。地域の姿をダイナミックに描き出すことができる地理学は、地域研究の中核を担うべき存在である(矢ヶ崎, 2000a, 2003b)。

私は1970年代後半からアメリカ合衆国とブラジルにおける調査研究を通じて、フィールドワークに基づいた研究に携わってきた。そうした過程で、南北アメリカ地誌を大きな枠組みで考察する

ことが重要であり、そのために文化地理学的アプローチが有効であると私は認識するようになった。また、地理学はさまざまなスケールで地域研究を行うが、地理学が得意とするフィールドワークに基づいたミクروسケールの地域研究をより広範囲の地域の枠組みに位置づけ、グローバルな理解に結びつけることが重要であると認識するようになった。

本論文では、南北アメリカ研究において地理学が蓄積してきた主な貢献を概観し、南北アメリカ地誌を描くための基本的枠組みを提示することを目的とする。まず、アメリカ合衆国における南北アメリカ研究と文化地理学研究の展開について概観し、環境と人間、起源と伝播、地域と景観、時間と変化という4つのアプローチが重要であることを指摘する。これに基づいて、南北アメリカに3つの経済文化地域の設定を試みる。そして、アメリカ合衆国の発展を経済文化地域の動態として考察する。最後に、経済文化地域の設定は日系社会を比較研究するための考察の枠組みとして有効であることを指摘する。

II 地域研究のための文化地理学的アプローチ

1. 地域研究と地理学研究者

私が30年余りにわたって南北アメリカの地域研究にかかわってきた経験を通じて、また南北アメリカを専門とする地域研究者との交流を通じて実感してきたのは、地域の認識の方法、地域への取り組み方、地域への関心度、地域を描く方法の点で、地理学と他の社会科学・人文科学との間かなりの隔たりが存在するという点である。一般に社会科学や人文科学を専門とする研究者は、同じ南北アメリカを研究対象としていても、文献に依存し、理論を志向し、政治・経済に強い関心を持っている。彼らの多くは調査地域へのこだわりが弱く、現地のコンタクトなしでは自由に歩き

回ることは難しい。一方、こうした分野の研究者は研究対象とする特定の国へ強いこだわりを持っており、アメリカ研究者、カナダ研究者、メキシコ研究者、ブラジル研究者のように、国別の専門家が存在する。そして強い専門性のゆえに、アメリカ合衆国の専門家はカナダを研究しないし、ましてやラテンアメリカについては興味も経験もない。ラテンアメリカ研究者の場合でも、ブラジルの専門家はペルーなどのアンデス諸国について本格的に研究することはないし、ましてやアメリカ合衆国は別世界である。

一方、地理学研究者の場合、現地への強いこだわり、弱い理論志向、政治や経済に関する低い関心、さまざまなスケールによる調査研究、そして比較研究への強い関心が一般に認められる。地理学研究者は現地を経験しなければ研究が始まったとは感じない。調査地域において多様な現実を目の当たりにすれば、頭に描いていた理論モデルは潔く忘れるかあるいは一時保留しておいて、現実の世界にのめり込んでいく。ローカルな地域に政治・経済のしくみや動向が大きな影響を与えることは認識しても、政治・経済そのものには比較的無関心である。地域を捉える場合に、ミクروسケールからグローバルスケールまでさまざまなレベルで自由自在に発想する。そして、ある地域の現象を他の地域と比較して考察するという比較研究を志向する。

地域研究にかかわる学問領域は3つのグループに分けられ、それらは地域研究の上部回路と下部回路を構成すると私は考えている(矢ヶ崎, 2003b)。政治学、経済学、国際関係論などの社会科学は、外交政策、経済政策、対外援助など、国家レベルでの政治や経済の動向を議論し、国家間の利害が絡み合う領域において政策決定に強い影響力を及ぼすことができる。また、言語学、文学、哲学、歴史学などの人文科学は、外国に關す

る文化的な理解を深めることに貢献し、これらの分野における研究の蓄積はその国のアカデミズムの水準を示すバロメーターでもある。しかし、このような2つのグループの学問領域は、現代に生きる人びとの生活や文化、地域に展開する社会や経済の動向、そして地域が抱える問題について現実的な理解は提示してくれるわけではない。社会科学や人文科学の学問領域は地域研究の上部回路を構成する。

一方、地理学は地域研究の下部回路を構成する。一つの国は多様な地域から構成されているという認識を前提とし、ミクロスケールの研究対象地域を設定してそこに展開する草の根の地域現象をフィールドワークに基づいて記述し分析しながら、その地域の理解を追及する。現地において人びとの生活や文化を具体的に描き、ローカルな社会や経済のしくみを明らかにし、地域像を提示するとともに、その地域が抱える諸問題を認識する。こうした研究対象地域には、地域的固有性が存在するとともに、国家に共通する特徴が投影されている。研究対象地域に生起する現象を材料として、国家の全体像を浮かび上がらせることも可能である。世界の諸地域がグローバルに結びついているというのは地理学的な発想であり、フィールドワークに基づいたミクロスケールの地域研究はグローバルな考察へと発展する。地理学研究者は多様で複雑な現実を相手にしているため、単純なモデルでは現実の地域を説明できないことを十分に認識している。グローバル化が進行するとともに地域の多様性に関する認識が高まっている今日、地理学研究者による地域研究、すなわち下部回路の地域研究はますます重要となっている。

2. アメリカ合衆国における地理学の動向と南北アメリカ研究

南北アメリカに関する地域研究については、ア

メリカ合衆国において研究が蓄積されてきた。また、南北アメリカへの地理学的な関心は、地理学という学術分野の動向を反映して変化してきた。19世紀から第二次世界大戦までのアメリカ合衆国の地理学の展開は、地理学の制度化が進行した20世紀初頭を境にして、制度化以前と制度化以後に分けることができる。どちらの時代にも、フィールドワークによる資料収集とそれに基づいて議論する野外科学としての地理学の伝統が存在した。

アメリカ合衆国における地域研究は、ドイツ、フランス、イギリスのようなヨーロッパ諸国とは異なった伝統を持つ。19世紀を通じてアメリカ合衆国は国内に広大な未知の世界を抱えており、J. W. Powellの業績に代表されるように(Powell, 1895)、地理学における地域研究の伝統は広大な西部フロンティアの実態を明らかにする過程で形成された。

20世紀に入ると、1903年にシカゴ大学大学院に地理学博士の学位を授与する大学院課程が設立され、また、1904年にアメリカ地理学者協会が設立されたことにより、地理学の制度化が進行した(James and Martin, 1978; Hudson, 1979)。第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて、地理学の専門家が徐々に増加し、フィールドワークに基づいたミクロスケールの地域研究が活発化した。初期の地理学研究者は地質学出身であったため、地形学研究とフィールドワークが地理学の中心であった。1920年ころまでにはフィールドワークの経験とフィールド調査法の知識が地理学研究者にとって必要だと考えられており、自然環境を基盤として人文現象を論じるという地域研究のスタイルが確立された(Barrows, 1910)。シカゴ大学大学院で学んだC. O. Sauerはそうした地理学研究の推進者の一人であった(Sauer, 1916, 1927)。

第二次世界大戦前には、外国に対する国家的な関心はまだ薄かったが、大学や財団が提供するさまざまな研究資金や渡航機会を利用して、地理学研究者は外国を対象とした地域研究に従事した。このさきがけとなったのは I. Bowman で、初期のラテンアメリカ研究に大きな足跡を残した (Bowman, 1916, 1924)。アメリカ合衆国におけるアカデミック地理学の伝統と 20 世紀中ごろまでのアメリカ地理学界の動向については、Blouet (1981) や James and Jones (1954) に詳述されている。

アメリカ国内に関する地域研究の伝統は第二次世界大戦後も継続した。戦前の地域研究は自然環境を基盤とした地域モノグラフに特徴付けられたのに対して、1960 年代から人文地理学の多様なテーマに直接取り組む意欲的な地域研究の蓄積が進んだ。中でも Meinig (1968, 1969), Jordan (1966, 1993), Ward (1971, 1989), Hart (1975, 1998), Zelinsky (1988, 1992) などの地域研究は、アメリカの地理を語る場合に不可欠な古典的な業績である。

こうしたアメリカ国内に関する地域研究と並行して、第二次世界大戦後から 1960 年代にかけて、超大国アメリカが世界各地に対して政治的経済的な関心を増大させるにつれて、外国に関する地域研究が活発化した。連邦政府の研究資金や財団の潤沢な研究奨学金を利用して、大学院生が長期的に外国に滞在して研究することが可能になり、若手の地域専門家の育成が促進された。一方、大学が拡張期を迎え、外国研究のための研究環境が整備された。Area Studies という名称のもとで、研究所や研究プログラムや大学院課程が設けられて学際的な研究と教育が促進された。外国の諸地域の中で特に地理学研究者が関心を持ったのがラテンアメリカであり、この地域研究への地理学研究者の貢献は重要であった (Parsons, 1964,

1973; Mikesell, 1973)。

一方、第二次世界大戦後、アメリカ合衆国の地理学は大きな変化を経験したが (Gaile and Willmott, 2003), その過程で伝統的な地域研究は縮小しつつある。一つの傾向は、フィールドワークに基づいた地域研究から系統地理学への重心の移行であった。1960 年代から 1970 年代にかけていわゆる計量革命が進行し、地理学研究者の関心は空間構造や空間秩序に関する一般法則と理論的説明にますます向けられるようになった。コンピュータの普及やセンサスなどの統計資料の整備は、計量化傾向を助長した。特にアメリカ合衆国を対象とした新しい地理学の研究が進んだ。

計量地理学は抽象的理論の構築を目指していたが、初期にみられた空間分析論文の多くはフィールドワークに基づいたデータを利用していた。しかし、1970 年代中頃までには、計量地理学の研究は統計資料にますます依存するようになっていた。こうして、人文地理学研究者の中には、地理学におけるフィールドワークの必要性に疑問を抱くものもいたという。すなわち、フィールドワーク以外の方法で入手した二次資料を用いて計量化が進展した人文地理学は、フィールドワークで得られたデータに基づいて計量化が進行した自然地理学とは異なった方向に進んだ (Rundstrom and Kenzer, 1989)。

1960 年代に進行した計量革命への反動として、1970 年代には人文主義地理学が進展し、人間の意識や主観に関心が向けられるようになった。このような新しい地理学の流れにおいて、哲学的な主張、人間心理の分析、風景の認識、絵画や文学作品の分析など、多様な関心や方法がみられたが、いずれにおいてもフィールドワークの意識は低かった (Ley and Samuels, 1978)。1970 年代から 1980 年代に進展した人文主義地理学は、計量地理学と同様、地理学をフィールドワークに

基づいた地域研究から遠ざけるように作用した。Rundstrom and Kenzer (1989) はアメリカ合衆国で刊行されている3つの主要な地理学雑誌を分析し、地理学研究における一次資料の収集とフィールドワークについて検討した。その結果、1970年代中頃からフィールドワークに基づいた論文が減少したことを明らかにしている。

さらに、1990年代以降のアメリカ合衆国の地理学は、地理情報システム (GIS) とグローバル環境政策にますます傾斜している。GISは人気の高い領域であり、大学や社会において地理学の評価を高めるための有力な手段となっている。実際、アメリカ地理学者協会の会員は増加の一途にある。しかし、このような最近の地理学の発展は、伝統的なフィールドワークに基づいた地域研究を犠牲にしながらか進展しつつあるようにみえる。

アメリカ合衆国の地理学において地域研究は衰退傾向を示している。アメリカを対象とした研究では、地域研究から系統地理学、計量地理学、GIS、環境政策に転換が進んできた。一方、外国研究では、1950年代や1960年代に比べると、1970年代に入って外国の地域研究を支援する態勢が縮小した。外国研究のための研究費や奨学金は以前のように潤沢ではない。外国語を習得し、調査資金を獲得し、長期的な現地調査を行う必要のある外国の地域研究は、若手のアメリカ人の研究者にとって魅力が薄れている。ただし、世界中から多様な人びとを受け入れるアメリカ合衆国では、移民やその子孫が外国の専門家としてこの国の地域研究を担うようになりつつある。

以上のようにアメリカ合衆国の地理学は変化してきたが、南北アメリカに関しては地域研究の伝統が維持されてきたようにみえる。ヨーロッパや日本と比べると、南北アメリカの地理学的研究の領域では、アメリカ合衆国の地理学研究者が多様な研究を蓄積してきた。そこには強い文化地理学

的な関心がみられる。古典的な論文集として知られる Wagner and Mikesell (1962) は文化地理学の優れた教科書であり、多様なアプローチを提示している。また、Dohrs and Sommers (1967) も文化地理学が魅力的な分野であることを語ってくれる論文集である。ラテンアメリカに関しては、各国で統計の整備が遅れていたことや、アメリカ人研究者が熱帯への関心を強く持っていたため、文化地理学的な研究課題と現地調査による研究法が維持されてきた (Parsons, 1964, 1973)。

南北アメリカの文化地理学を語るときに、Sauerを中心としたパークレー学派の地理学について語る意義は大きい (久武, 2000)。Sauerはシカゴ大学で博士号を取得した後、ミシガン州などで調査に従事し、1920年代に若くしてカリフォルニア大学パークレー校の地理学教室を主宰するようになった。そして1975年に逝去するまで数多くの著作を残すとともに、パークレー学派の文化地理学と呼ばれる学風の形成に寄与し、アメリカ合衆国の地理学界に大きな影響を及ぼした (Parsons and Vonnegut, 1983; Kenzer, 1987)。地理学の主流は伝統的な地域研究から離れてはきたが、文化地理学的な関心に基づいた地域研究は継続されている。最近の例をいくつかあげるとすれば、Arreola (2004) はアメリカ合衆国におけるヒスパニックの文化について、Gumprecht (1999) はロサンゼルス地域の変化について、Zimmerer (1996) はアンデスにおける生活様式について論じている。

3. 文化地理学の4つのアプローチ

以上のようなアメリカ合衆国における地域研究と文化地理学の伝統を念頭に入れて、南北アメリカに関する文化地理学的な理解を深めるために、研究の枠組みを考えることにした。南北アメリカの地域研究には、環境と人間、起源と伝播、地域

と景観、時間と変化という4つの文化地理学的なアプローチが重要であると私は考えている。南北アメリカ研究に従事する他分野の研究者と比較すると、このような視点と関心は地理学研究者による南北アメリカ研究を特徴付けている。それぞれについて文献を網羅的にレビューするスペースはないが、南北アメリカ研究に中心的な役割を演じてきたアメリカ合衆国の地理学研究者の業績を中心に概観してみたい。

1) 環境と人間：環境を改変する人間の役割

環境と人間の関係は地理学の中心的な課題であると長い間考えられてきたが、環境決定論に対して批判的な立場を維持し、新たな研究課題を提示したのが環境に対する人間のインパクトの研究であった。G. P. Marsh の『人間と自然』(Marsh, 1864) を再評価することを通じて登場したこの環境改変論は、『地表面の改変における人間の役割』(Thomas ed., 1956) の出版を契機に活発化し、この分厚い論文集はその後の文化地理学的な環境論のバイブルとなった。環境改変論のリーダーは Sauer であり、彼はアメリカ合衆国の文化地理学に大きな影響を及ぼした。Sauer の関心の一つは先住民の環境利用を文化史の観点から描くことであり (Leighly, 1963; Sauer, 1981), パークレー学派の地理学研究者は南北アメリカの自然環境と人間の環境利用について多様な研究を蓄積してきた。特筆すべきは、J. J. Parsons と W. M. Denevan である。

コロンビアの歴史地理学研究で知られる Parsons は、マグダレナ川の支流であるサンホルヘ川の湿地帯で前コロンブス時代のものとみられる人工的な盛土畑(英語では raised fields や ridged fields と呼ばれる)の遺構を発見した (Parsons and Bowen, 1966)。同じような盛土畑の遺構はエクアドルのグアヤス川下流部でも確認された (Parsons, 1969)。カリフォルニア大学バー

クレイ校で Parsons のもとで学んだ Denevan は、ボリビアの熱帯サバンナの本ホスで同様の盛土畑の存在を確認した (Denevan, 1966)。空中写真や小型飛行機を利用することによって、人工的な微地形の存在が明確となった。こうしてメキシコ盆地のチナンパに似た人工的な盛土畑と集約的農業が南アメリカにも存在したことが実証されたわけである (矢ヶ崎, 1995)。

Parsons や Denevan による新しい研究の成果が発表されると、南アメリカ各地で調査を行っていた研究者が空中写真を手がかりにして盛土畑を相次いで発見した。こうして到来した盛土畑研究のブームによって、前コロンブス時代の農業に関する従来の認識が根本的に修正されることになった。1992年にワシントンDCで開催された国際地理学連合大会(IGC)の本会議では、「変貌する南北アメリカを発見する」という大きな課題のもとで一連のシンポジウムが開催され、コロンブス以前の南北アメリカやコロンブスのインパクトについても議論された。アメリカ地理学者協会(AAG)はその年報の第3号を特集号『1492年以前と以後の南北アメリカー現在の地理学研究ー』(Butzer, 1992)として刊行し、IGCの登録者に配布した。この特集号に収められた Denevan (1992b)論文には先住民の遺構の全容が分布図として示されており、盛土畑はメキシコ中部、ユカタン半島、オリノコ川流域、アンデス高地などを含めて広域に確認されたことが理解できる。集約的農業の存在は多くの人口を維持できる食糧生産基盤を意味するものであり、これは前コロンブス期の先住民人口に関する従来の人口推計を大きく修正した。従来、南北アメリカの先住民人口は800万から1,500万と推計されていたが、最近の研究者は4,000万から1億の範囲で推計しており、Denevan (1992a)は5,400万という新しい人口推計を提示している。このような文化地理学研究

は、南北アメリカの自然環境とそれを利用した先住民の世界を具体的に明らかにしつつある。

一方、15世紀末のコロンブスの到来以降、ヨーロッパ人が南北アメリカの自然をどのように認識し、環境を改変しながら植民活動を展開したのかは重要な文化地理学の課題である。ヨーロッパ系移民による植民と農業開拓については事例研究の蓄積が実に多い。Sauerもヨーロッパ人が認識した新大陸に関心を寄せた(Sauer, 1971, 1980)。ヨーロッパ系の移民集団ごとに研究が行われてきた中で特に注目を集めてきたのがドイツ人であった。Lemon (1972) はドイツ人移民が優秀な農民であるというステレオタイプの真偽についてペンシルヴェニアを対象として詳細な検討を行った。Jordan (1966) はテキサスにおけるドイツ人の農民の世界を描いた。Raup (1932) は南カリフォルニアのアナハイムに建設されたドイツ人入植地の変化について論じている。

ヨーロッパ人の北アメリカへの移住と植民に関する研究を大まかに分類すると、地域に関する研究、伝播に関する研究、景観に関する研究、成功した最初の集落に関する研究、ヨーロッパ文化の変容に関する研究、環境知覚に関する研究、地表の改変者としての人間に関する研究があげられる。これらはきわめて記述的であるため、どうしてそのような事象が起きたのか、また、どうしてそのような文化が展開したのかについては説明されない。ヨーロッパ移民の流入とヨーロッパ文化圏の拡大を説明するために、Jordanは「前適応」概念を適用することを提唱した(Jordan, 1989)。前適応とは人間社会が移住に先立って所有する特性の複合体であり、それが新しい環境の下で植民活動に当たる際に競争力となる。特定の環境において植民に従事するために、あるヨーロッパの地域の文化は他の地域の文化よりもより前適応していた。ヨーロッパから導入された文化が北アメリ

カで存続する確率は、前適応の水準と連動していた。このような前適応の考え方は、北アメリカのヨーロッパ系移民以外を研究する場合にも適用することが可能である(矢ヶ崎, 2004a)。

2) 起源と伝播：大陸間の交流とそのインパクト

地表面は連続しており、交通手段の発達に伴って、人、物、技術、情報などが自由に移動して広域な交流がおきる。起源と伝播、特に大陸間の交流とそのインパクトに関して文化地理学は多大な関心を払ってきた。このような研究の推進役となったのもSauerであった。Sauer (1952) は、科学的な研究が急速に進展する以前の時代に利用できた研究成果に基づいて、環境と文化に着目して農業の起源と伝播を大胆に推論した画期的な業績であった。この研究はさまざまな地理的事象の起源と伝播を考察するための枠組みを提示したことでも評価される。Sauerが扱ったのは前コロンブス時代であったが、ヨーロッパ文化圏が大西洋を越えて拡大した結果として、人間や動植物、そして技術・制度・文化の交流が加速化され、南北アメリカの先住民の世界は著しい変貌を余儀なくされた。

コロンブスの新大陸到来を契機とした起源と伝播に関して、特にバークレー学派の地理学研究者によって多くの研究が蓄積された。Stanislawski (1946, 1947) は、方形状都市プランの起源と伝播について、起源地であるインダス文明のモヘンジョダロから植民地時代の新大陸までを追跡した。Parsons (1972) はラテンアメリカへのアフリカ起源の牧草の導入とそのインパクトに着目し、Parsons (1983) ではカナリア諸島の人びとによる南北アメリカへの継続した移住とその意義が論じられた。最近では、Carney (2001) がアフリカ起源の稲作の導入について論じている。

南北アメリカの広域な地域に最も大きな影響を及ぼしたのはさとうきびの導入であり、さとうき

びを原料とした砂糖生産のためのプランテーションシステムであった。この課題に本格的に取り組んだのは Galloway (1989) である。さとうきびを原料とした製糖業がインド北部で始まり、西アジアから地中海地域、そしてマデイラやカナリアといった大西洋の島々を経由して南北アメリカに伝播した過程が論じられる。さらに、ブラジル北東部や西インド諸島におけるプランテーションの設立と展開について、特に 16 世紀から 19 世紀にかけてのブラジル北東部の製糖業について、初期の導入過程から近代的大規模製糖への移行期までが詳細に検討されている。

一方、Jordan は北アメリカの文化地理を論じる際に、ヨーロッパ人によって導入された文化とその起源に強い関心を寄せた。彼が着目したのは丸太小屋であった。この建築様式がヨーロッパのどこに起源を持っているのか、そして北アメリカに導入されたこの建築様式がどのように伝播したのかについて、伝播論と文化生態学の視点から検討した (Jordan, 1985 ; Jordan and Kaups, 1989)。Jordan によれば、北アメリカの未開拓森林地における開拓文化は北ヨーロッパ起源であり、前適応した文化の原型は 17 世紀のフィンランドとスウェーデンで認められる。1638 年にデラウェア川下流部に設立されたニュースウェーデン植民地の人口のかなりの割合がフィンランド系であった。フィンランド東部の内陸出身のフィンランド人は森林開拓文化複合を発展させており、それがアメリカに導入されて森林奥地開拓の文化を形成する基盤となった。実は Sauer (1930) も、中部植民地の森林開拓文化はデラウェアのスウェーデン・フィンランド系植民地の丸太小屋建築と開墾技術に由来すると指摘している。

また、Jordan (1993) は牛と放牧の起源と伝播に着目し、アメリカ西部に展開した自由放牧が旧大陸のどの地域から導入され、どのような経路

で伝播してアメリカ西部に定着したのかを詳細に論じた。Jordan は歴史家の F. J. Turner や W. P. Webb の考え方を決定論的だと否定し、放牧はフロンティアや半乾燥の西部で生まれた生業形態ではなく、移民によって旧世界から持ち込まれたものだと考えた。移民の中には放牧によく前適応していた人びとがいて、イベリア半島南西部、イギリスの高地、西アフリカのサハラ南部のステップが放牧業の起源地であったが、これらの地域の中で最も影響力が大きかったのがイベリア半島からの伝播であった。イベリア半島では、南西部の低地と中西部の台地で異なった牧畜形態がみられた。グアダルキビル川下流のラスマリスマスには湿地帯および湿地帯周辺の森林や穀物畑という 2 つの生態系があり、放牧方式は 2 種類の生態系に適応していた。一方、エストレマドゥラを中心としたメセタ台地の西部では、ラスマリスマスとは自然環境と放牧方式が異なっており、穀物と家畜の混合農業がみられ、牛や馬よりも小型家畜（羊、ヤギ、豚）が重要であった。旧世界における 3 つの牧畜の伝統が遭遇したのが西インド諸島であった。ヒスパニオラ、ジャマイカ、キューバ、プエルトリコなどの島々には、イベリア半島、イギリス、アフリカから牛の放牧の伝統を持った人びとが流入し、牧畜の多様な様式が到来したが、それらの中からアメリカの環境に適した放牧方式が融合・形成された。これらの島々から大陸部への人びとの移動に伴って、放牧の伝統がメキシコやアメリカへと伝播し、それぞれの地域の自然環境に適応することによって牧畜業が形成され、さらに時間の経過とともに放牧地帯が移動した。

以上のように、コロンブス以降の南北アメリカを文化地理学の視点で検討するためには、旧大陸から新大陸への地理的事象の伝播が重要な課題となる。なお、Crosby (1972) が示したように、こうした交流は一方的なものではなく、病気に代

表されるように、大陸間の相互交流とそのインパクトは甚大であった。

3) 地域と景観：文化地域の設定と文化景観の解釈

南北アメリカは過去5世紀あまりの間に著しい地域変化を経験した。南北アメリカの先住民の世界は、15世紀末のコロンブスの到来以降、著しい変貌をとげた。ヨーロッパから持ち込まれた天然痘や麻疹をはじめとする病気によって先住民人口の9割が消失したといわれており、ヨーロッパからの移住者が新たな文化景観を作り上げた。それぞれの地域の条件と導入されたヨーロッパ文化を反映して、文化地域と文化景観は多様である。文化地理学では文化景観の形成に大きな関心が払われるとともに、新たな文化地域の設定が研究課題とされてきた。

農業地域に関しては多くの研究がある。Sauer (1941a) は、アメリカ東部の森林地帯の開拓を論じるなかで、大西洋岸に展開した中部植民地(ミドルコロニー)にはヨーロッパから農民が流入して家族農場経営を行い、このような農業様式がアメリカ農業の発展の基盤となったことを指摘した。東部森林地域における先住民の農耕技術がヨーロッパ移民によって採用され、特にとうもろこしの存在は重要であった。植民地の始まりは農耕ではなかったが、中部植民地にはヨーロッパの農民が定着し、独立自営農民の経営する家族農場が分散立地する植民形態が形成された。ここではヨーロッパから導入された農業技術、作物、家畜にととうもろこしが組み込まれて生産性の高い農業様式が形成され、これが東部の森林地域からプレーリーにかけての地域において農業開拓を推進する原動力となった。

飼料作物のとうもろこしの栽培に重心を置いたコーンベルト方式の混合農業経営は、開拓民の内陸への流入に伴って西へと拡散し、アメリ

カ農業の伝統となった (Spencer and Horvath, 1963)。Hudson (1994) はコーンベルトと呼ばれる農業地域の形成について論じた。Williams (1989) は森林の開拓について、Hewes (1973) や Shortridge (1995) は草原の開拓について論じた。草原の開拓に伴って農業地域が拡大したが、農場を囲む牧柵は景観研究の大きな対象となった (Hewes and Jung, 1981; Hewes, 1981)。また、農業開拓の進行に伴って民家形態がどのように伝播したのかという課題に関しては、Kniffen (1965) が実証的に提示した。

北アメリカの農村景観と農業地域に継続的な関心を払ってきたのは J. F. Hart であり、目に見える景観要素に着目してアメリカの農村地域を論じ続けている (Hart, 1998, 2003)。アメリカ合衆国の農村に規則的で画一的な景観を形成する原動力となったのは連邦政府による方形測量であった。アメリカがヨーロッパと異なっていたのは広大な土地の存在と少ない労働力であり、労働力不足を克服するために導入された新しい方式が、迅速に広域な土地を測量することのできるタウンシップ方式の方形測量であった。これはアメリカの景観に規則的な刻印を刻んだ (Pattison, 1964; Johnson, 1976)。

一方、文化地域の設定に関して文化地理学研究者はさまざまな試みを行ってきた。南北アメリカでは植民地支配からの独立後にそれぞれの地域が独自の発展を経験し、地域性が形成された。アメリカ合衆国の文化地域区分は、最初に入植したヨーロッパ移民やその後の発展に貢献した人びとが持ち込んだ文化に着目して行われる。それは、ヨーロッパから導入された複数の文化的伝統が新しい土地でどのように展開したかという観点から地域性を見出そうとする方法である (矢ヶ崎, 2006)。

例えば、Zelinsky (1961) は宗教に着目して文

化地域を設定した。また, Zelinsky (1992) はヨーロッパ文化の導入と植民過程に着目して5つの大区分と副次地域を設定した。アメリカ合衆国の文化地域はヨーロッパに起源を持っており, 大西洋岸に位置した3つの主要な植民地文化の中心地を起源として, そこからの発展・拡大によって全米に文化地域が形成された。一方, Zelinsky (1980) は住民の地域認識に着目して, 各都市の電話帳に記載された団体名を分析することによって文化地域を設定した。また, Shortridge (1987) は東部, 西部, 南部, 中西部という伝統的な4地域区分について, ラジオ購入者が保証書に記載した居住地域の自己申請を手がかりにして境界線を確定するという方法により, 住民の地域認識を論じた。

アメリカ合衆国に境界線を設定して複数の地域に分けるという手法にかわって, Meinig (1965) はモルモン文化地域が形成される過程を検討し, 核心部, 領域, 縁辺部という文化地域の内部構造を明らかにした。この研究は文化地域の形成と構造を考える上で示唆に富んでいる。

なお, 文化地理学研究者は多くの地誌書を出版している。West and Augelli (1976) は中部アメリカを対象としたバランスの取れた文化地理学的な地誌である。James (1942) はラテンアメリカ地誌の古典であり, 北アメリカ地誌についてはHudson (2002) がある。これらの地誌はいずれも文化地理学研究者による地域論であり, 地域の描き方に関して独自の方法を提示している。

4) 時間と変化：過去の復元と地域変化の理解

地域はダイナミックに変化し, それに伴って文化景観や文化地域も変化する。文化地理学における歴史地理学的な視点, すなわち時間要素の重要性についてはSauer (1941b, 1974) が指摘している。Sauer自身は歴史地理学という用語はほとんど使用しなかったが, 彼の地理学は本質的に長い時間スケールによる文化史であり, 歴史

地理学的な研究であった (Sauer, 1966; Leighly, 1963)。パークレー学派の文化地理学は基本的には歴史地理学的であり, その代表は植民地時代の鉱山に関して歴史地誌モノグラフを描いたWest (1949) であろう。

Sauerの伝統をカリフォルニア大学パークレー校で引き継いだParsonsも歴史地理学的であった (Parsons, 1968, 1977; Denevan, 1989)。一方, 歴史地理学を前面に出して北アメリカの研究を行ったのはA. H. Clarkとその弟子たちであった (Clark, 1968; Gibson, 1978)。Clarkもカリフォルニア大学パークレー校大学院においてSauerのもとで学び, 歴史地理学の伝統をウイスコンシン大学マディソン校で発展させた。Clarkが編集した北アメリカ歴史地理シリーズ (Historical Geography of North America Series, オックスフォード大学出版会から刊行) は, 北アメリカの各地域に関する魅力的な歴史地理の蓄積を目指した。Meinig (1971) はアメリカ南西部を, Ward (1971) はアメリカの都市と移民を, Harris and Warkentin (1974) はカナダを, McManis (1975) はニューイングランドを, Johnson (1976) はミシシッピ川上流部の方角測量を, Gibson (1976) はロシアの進出地域を描いた。

文化地理学研究者は歴史地誌の手法を用いて地域性の形成を論じてきた。D. W. Meinigはもともアメリカ北西部の歴史地誌に関する研究で世に出た (Meinig, 1968)。彼は最近では, ヨーロッパ文化の導入時から20世紀初頭にかけてアメリカがどのような歴史地理学的プロセスによって形成されたのかという壮大な課題について, 歴史地誌の3部作 (1492年から1800年までの大西洋岸地域, 1800年から1867年までの内陸部の開発, 1850年から1915年までの大陸国家の形成) によって論じている (Meinig, 1986, 1993, 1998)。Meinigの著作からは地域変化の記述法に関して

学ぶ点が多い。

なお、歴史地理学から見た北アメリカの地域像は Mitchell and Groves (1987) にバランスよく示されており、基本的な教科書として研究者にも利用価値が高い。

Ⅲ 南北アメリカにおける3つの経済文化地域

1. 3つの経済文化地域

コロンブスの到来を契機とした南北アメリカの地域変化は劇的であり、文化地理学にとっての重要な研究領域である。Ⅱにおいて概観した4つの文化地理学のアプローチと研究成果、および私がアメリカ合衆国やブラジルで携わってきた体験に基づいて、南北アメリカを文化地理学の観点から理解するための考察の枠組みを提案してみたい。すなわち、南北アメリカを対象として、イベリア系牧畜経済文化地域、プランテーション経済文化地域、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域という3つの経済文化地域の設定を試みる(矢ヶ崎, 2004b)。これらの経済文化地域は、南北アメリカの先住民の世界に、ヨーロッパ人の流入に伴ってヨーロッパから異なる制度や文化が導入されることによって形成された。それぞれの経済文化地域では、植民の方法、植民地経済の構造、環境の利用、社会的文化的な伝統、人口構成に地域差がみられるとともに、これらの経済文化地域は植民地時代以降の地域の発展のあり方を規定することになった。今日の南北アメリカの地理的特徴のかなりの部分はこれらの経済文化地域の存在に規定されていると考えられる。南北アメリカにおける3つの経済文化地域の範囲と、ヨーロッパにおける起源地を模式的に示したのが図1である。

北アメリカの大西洋岸から内陸部にかけて、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域が形成された。これはヨーロッパ北西部から小農民の伝統をもつ人びとが移住した結果である。この経済文化地域

の南側にはプランテーション経済文化地域が形成され、それは西インド諸島から南アメリカの大西洋岸に沿って存在した。この経済文化地域では、栽培された作物は地域によって異なるが、ヨーロッパ市場向けの大規模で商業的な農業生産や農産加工が行われた。一方、北アメリカの南西部から中部アメリカをへて南アメリカにいたる地域にはイベリア半島から家畜と牧畜文化が導入され、イベリア系牧畜経済文化地域が形成された。3つの経済文化地域の特徴について概要を説明してみよう(表1)。

2. 北西ヨーロッパ系小農経済文化地域

北アメリカの大西洋岸は北西ヨーロッパからの移住者によって開拓された。マサチューセッツからヴァージニアにかけての沿岸部には、ヨーロッパ系移民の故郷と極めて類似した植生が存在した。この森林地帯は北西ヨーロッパ出身の農民が定住するためには好適な環境であり、ヨーロッパの森林文化と農業様式は無理なく移植された。

大西洋岸の植民地は、北からニューイングランド植民地、中部植民地、南部植民地に大別されるが、中でも中部植民地には北西ヨーロッパから作物や家畜と小農民の伝統が導入され、農業発展の中心地が形成された。ハドソン川流域からチェサピーク湾北岸にかけて、ヨーロッパから多様な人びとが流入し、小規模な土地所有に基づく家族農場、分散型の農場の立地、とうもろこしを中心とする自給的混合農業、住宅や納屋などの木造建築が典型的な特徴となった。ドイツ系農民は優秀な農民であるというステレオタイプもここで生まれた。

中部植民地で誕生した農業様式はコーンベルト方式と呼ぶことができる。これはヨーロッパから導入された混合農業の伝統にアメリカ原産のとうもろこしが組み込まれた農業様式であった。とう

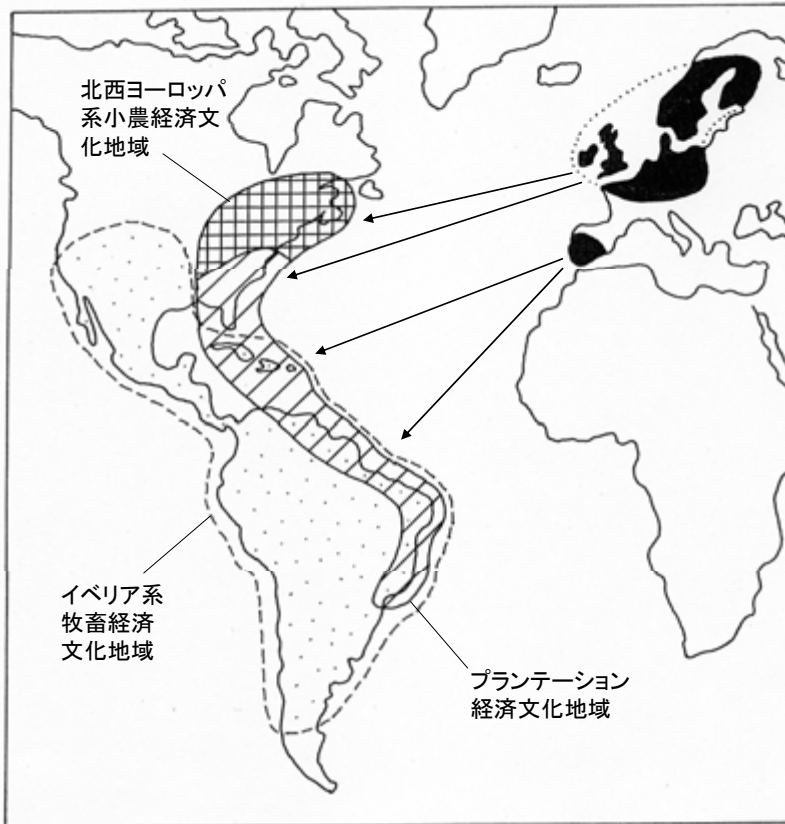


図1 19世紀までに形成された南北アメリカの3つの経済文化地域とその起源

表1 南北アメリカにおける3つの経済文化地域の特徴

	イベリア系牧畜 経済文化地域	プランテーション 経済文化地域	北西ヨーロッパ系 小農経済文化地域
自然環境	熱帯 亜熱帯 温帯 草原 サバンナ	熱帯 亜熱帯	温帯
土地制度	大土地所有	大土地所有	小規模土地所有
農場	大牧場	大農園	小規模家族農場 分散型農場
土地利用	牛の粗放的放牧 牛皮 牛脂	さとうきび タバコ 綿 米 コーヒー	混合農業 (家畜 + 飼料作物)
労働力	住込み労働者 カウボーイ	アフリカ系奴隷 移民	家族労働力
社会構造	階層構造 不平等	階層構造 不平等	民主主義社会
都市	牧畜を基盤とした繁栄 消費経済の中心 不在地主	農業を基盤とした繁栄 消費経済の中心 不在地主	都市住民による 商工業の発達

もろこしはヨーロッパに存在した作物よりもはるかに優れた飼料であり、ヨーロッパから導入された小麦、カラス麦、ライ麦、クローバーなどと組み合わせられて輪作体系が確立され、家畜飼育の生産性が向上した。

小農民のフロンティアを象徴する存在となったのは丸太小屋であった。丸太建築の技術はスウェーデン人やフィンランド人の農民の移住によってデラウェア川流域の植民地に導入され、しだいに北アメリカにおける開拓民の生活様式に組み込まれるようになった。開拓農民の移動に伴ってこの建築様式は西方へ拡大し、グレートプレーンズ近くまで達した。時代がたつて丸太小屋が衰退しても、この質素な建造物はアメリカ人にとって開拓時代の生活と文化を連想させる歴史的な存在となった。

T. Jefferson 大統領に代表されるように、独立した家族農場を経営する農民が民主主義社会の基盤であるという認識から、19世紀には小規模家族農場を振興する農業政策が推進された。未開拓の土地を迅速に測量して分割して払い下げるために、タウンシップレンジ方式の土地測量制度が採用された。一般先買権法(1841年)やホームステッド法(1862年)のように、小区画の土地(典型的には160エーカー、すなわち約65ha)を払い下げる法律が施行された。

北西ヨーロッパ系小農経済文化地域では、都市の繁栄は都市における産業活動によってもたらされた。農業地域と都市は経済的には分離しており、都市の発展は農業地域を基盤とはしなかった。この点はヴァージニアとその南に広がるプランテーション経済文化地域とは異なっていた。

中部植民地で誕生した農業様式は西へと拡大した。19世紀中頃までには、アメリカ合衆国の北東4分の1の地域に北西ヨーロッパ系経済文化地域が形成されていた。オハイオ川と五大湖の間の

プレーリーでは、中部植民地と同様のコーンベルト方式を適用することができたし、ヨーロッパから導入された雑穀、牧草などの生育に適していたので、とうもろこし・クローバー・カラス麦を輪作して豚が飼育された。一方、気候的に涼しい五大湖沿岸の地域ではとうもろこしの重要性は薄れたが、短く涼しい夏に適した根茎作物や穀物が重要になり、酪農業が発達した。以上のように、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域は、北西ヨーロッパの小農民の伝統が大きな修正を必要とせずに移植された地域であった。

3. プランテーション経済文化地域

南北アメリカの大西洋岸には、ヨーロッパ人による植民活動によってプランテーション経済文化地域が形成された。北アメリカではヴァージニアから南の大西洋岸と内陸地域、西インド諸島、そして南アメリカ東部の大西洋岸を含む地域である。

この経済文化地域では熱帯気候や温暖湿潤気候が卓越し、熱帯・亜熱帯性の作物の栽培にとって好適な環境が存在する。そのため、ヨーロッパ市場向けのプランテーション作物の栽培・加工が植民地経済の中心となった。プランテーションの経営に必要な資本、施設と技術、土地制度、作物はいずれもヨーロッパ人によって導入された。特に大土地所有制はプランテーションの基盤となり、大地主を頂点とするピラミッド型の階層社会が形成された。栽培された作物は、タバコ、綿花、米、さとうきび、コーヒーなど、地域や時代によって異なっていたが、プランテーションシステムに基づく類似した経済と社会が展開した(Pan American Union, 1959)。

プランテーション経済文化地域では先住民人口は一般に少なかったし、天然痘や麻疹などの病気の流行が先住民人口をさらに減少させた。先住民

の労働力に依存してプランテーションを営むことは難しかったため、多量の労働力が導入された。例えば、ヨーロッパ系移民（年季奉公人）、アフリカ系奴隷、アジア系移民などである。特に奴隷制のもとでアフリカから強制移住させられた人びとは、プランテーションにとって重要な存在となった。多様な労働力の導入に伴って、プランテーション経済文化地域では人口構成が複雑化した。

プランテーション経済文化地域では農業活動が経済の基盤であり、プランテーションが生み出す富は都市に蓄積されて、都市経済が繁栄した。都市は不在地主の居住地でもあり、消費活動の中心となった。この点でプランテーション経済文化地域は北西ヨーロッパ系小農経済文化地域とは明らかに異なっていた。植民地が独立した後もプランテーションシステムは継続し、社会や経済の発展に継続的な影響を及ぼすことになった。

プランテーション作物の中で最も大きな影響を与えたのがさとうきびであり、それを原料とした砂糖の生産は植民地経済の中心となった。さとうきび栽培と砂糖生産は、地中海沿岸地域を経てマデラ、カナリア、サントメなどの大西洋の島々に導入され、そこでプランテーションシステムの原型が形成された。コロンブスはさとうきびを新大陸に導入した。特にブラジル北東部の沿岸部は理想的な気候、肥沃な土壌、燃料としての木材の資源に恵まれ、さとうきび栽培と砂糖生産にとっては最適な環境であった。16世紀に入って間もなくすると、エンジェーニョと呼ばれる小規模な砂糖プランテーションが建設された。製糖業の初期の中心は、ペルナンブコの湿潤な海岸平野とバイアのトドズオズサントス湾沿岸地域であった。

開拓を促進するために導入されたセズマリア制は広大な土地を賦与する制度で、これが大土地所有制の基盤となった。エンジェーニョは砂糖生産

のための経済的単位であり、さとうきび栽培と砂糖生産に携わるさまざまな人びとが生活する社会的単位でもあった。エンジェーニョ所有者は明確な社会経済階層において上層を構成した。このような社会のしくみは、18世紀以降、経済の中心がブラジル南東部に移動しても変化しなかった。さらに、19世紀末から20世紀初頭にかけて、エンジェーニョから大規模中央工場（ウジーナ）への転換という砂糖産業の近代化が進展したが、この過程でエンジェーニョの所有者はサトウキビ供給者となり、ウジーナ所有者が社会経済階層の頂点を占めるようになった（矢ヶ崎・斎藤、1992）。すなわち、砂糖産業の近代化は社会構造の変革を伴うものではなかった。プランテーションシステムがブラジル北東部の社会と経済に決定的な影響を与えたことが理解できる。

16世紀にブラジル北東部に展開したプランテーションシステムは熱帯を中心に広域に拡散した。西インド諸島は第2の中心地となった。17世紀にはバルバドスやネビスというイギリス領の島々にプランテーションシステムが導入されたし、17世紀末にはジャマイカでも始まった。18世紀に入るとフランス領のマルティニークやグアドループで、19世紀に入るとキューバにおいてもプランテーションシステムに基づいた砂糖経済が展開した。さらに、19世紀前半には北アメリカのルイジアナでも砂糖プランテーションが発展した。なお、南北アメリカ以外をみると、19世紀には東南アジア、ハワイ、オーストラリアのクイーンズランドでも砂糖プランテーションが始まっている。ブラジル北東部の砂糖経済の繁栄は16世紀と17世紀であったが、プランテーションシステムに基づいた砂糖生産が世界各地で活発化するにつれて、世界市場におけるブラジル北東部の重要性は低下した。

プランテーションで栽培される作物はさとうき

びに限定されるものではない。植民地時代のアメリカ大西洋岸の南部植民地では、タバコ、米、綿花、インジゴが経済の中心であった。ヴァージニア植民地はロンドンヴァージニア会社によって設立されたが、この会社は新しい貿易ルートの開拓や貴金属の開発などを目的として貴族や富豪商人が投資した営利目的の企業であった。ヴァージニアにおける土地払い下げは当初から個人を対象として行われ、移民一人に対して50エーカー(20ha)が無償で賦与されたし、土地の売却も行われた。その結果、土地所有の集中化が進行して大地主が形成され、社会経済階層の分化が進んだ。ヴァージニア植民地ではタバコが経済の中心となり、タバコプランテーションはほぼ自給的な経済単位となった。そのほか、米、インジゴなどの特産物を本国に輸出する植民地経済が展開した。同様のプランテーションシステムは、アメリカ南部では奴隷制に基づいた綿花王国の発展を促した。

ブラジルでは、16世紀から砂糖経済が展開した北東部がプランテーションシステムの一次中心地であったが、19世紀からプランテーションシステムに基づいたコーヒー経済がブラジル南東部で繁栄した。リオデジャネイロの周辺で始まったコーヒー栽培は、西方のパライバレーを経て、カンピナス、さらにサンパウロ奥地へ拡大した。ここでもコーヒープランテーションは大土地所有制を基盤とした。労働力として当初はアフリカ系奴隷が導入されたが、すでに奴隷制廃止以前から住み込み労働者(コロノ)が労働の基盤となった。特にイタリア系移民がコロノとして重要であったが、20世紀に入ると日系移民が重要な役割を演じた。コーヒープランテーションの繁栄によって生み出された富はサンパウロ市に蓄積され、コーヒー経済が崩壊した後の工業化による経済発展の基盤となった。

4. イベリア系牧畜経済文化地域

3つの経済文化地域の中で最も広域に展開したのはイベリア系牧畜経済文化地域である。北アメリカ中南部・南西部から中部アメリカを経て、南アメリカのほぼ全域にこの経済文化地域が形成された。なお、西インド諸島と南アメリカ東部では、プランテーション経済文化地域との重複がみられる。この広大な経済文化地域はスペインとポルトガルが植民地支配した地域であり、イベリア半島から牛の放牧を基盤とした粗放的牧畜の伝統が導入された。自然環境は多様であり、熱帯、亜熱帯、温帯、乾燥、高山などの気候やさまざまな植生がみられる。

イベリア系牧畜経済文化地域の基盤は大土地所有制である。ポルトガル植民地ではセズマリア制、スペイン植民地ではランチョ制など、大規模な土地を少数の人びとに賦与する方式が採用され、これを基盤として大土地所有制が確立された。所有地の境界が不明瞭な大牧場で粗放的牧畜業が行われ、カウボーイが天然の牧野を利用して牛を放牧した。牛皮と牛脂が主な商品であった。

大牧場の所有者は、経済的にも政治的にもそれぞれの地域において重要な役割を演じるようになった。牧場主を頂点とする明瞭な社会経済階層が確立した社会において、牧場で働くカウボーイや住み込み労働者は社会の下層を構成した。粗放的放牧が行われた大牧場は莫大な富を生み出すわけではなかったが、大地主(すなわち牧場主)であることには社会的地位と名声が伴っていた。大多数の人びとは土地を所有することはなく、社会的な不平等が深刻化した。大牧場の所有者は不在地主で、牧場ではなく都市に居住した。都市は政治と消費経済の中心であった。

ブラジル北東部では、半乾燥の内陸部はセルトンと呼ばれ、カーチング植生に覆われていたが、ここでセズマリア制によって賦与された大規模な

所有地で牛の粗放的放牧が営まれた。牧場はファゼンダ、牧場所有者はファゼンデイロと呼ばれ、そこにはカウボーイ（ヴァケイロ）や住み込み労働者（モラドル）が何世代にもわたって住み込んで生活した（斎藤・松本・矢ヶ崎，1999；丸山，2000）。ファゼンダという大牧場方式は、植民の進行に伴ってブラジルの他の地域にも拡散した。一方、アルゼンチンのパンパでは、スペイン人が持ち込んだ牛が野生化して繁殖し、それを捕獲するカウボーイ（ガウチョ）の文化が形成された。19世紀には移民と資本が導入されて農業の集約化が進行し、ヨーロッパへの牛肉の供給地として発展した。こうした過程で牧畜文化は社会と経済の基盤となった。また、アンデス山脈では山間盆地の平坦部に大牧場が形成され、粗放的に利用された。このような盆地にみられる大規模土地所有と粗放的土地利用は、現在でも山腹斜面にみられる小規模所有地および集約的土地利用とは著しい対照をなしている。スペイン植民地の北部に位置していたカリフォルニアでも、スペイン植民地時代およびメキシコ統治時代に、ランチョと呼ばれる大牧場が賦与された。この大規模土地所有形態はアメリカ時代に入っても存続し、小規模家族農場による農業発展の障害となった。

牛と大土地所有を基盤とした社会と経済は、ラテンアメリカの多くの地域において今日でも重要性を維持している。それは社会的不平等の要因でもある。ブラジルでは、農地改革が一部で行われているにもかかわらず、少数の地主によって大牧場ファゼンダが所有され、大多数は住み込み労働者や小作であるという不平等な現実が継続している。大地主が大豆などの商業生産を目的として従来の粗放的な大牧場を大農場に転換すると、住み込み労働者が土地を追われ、大都市へ流入してスラム人口が増加するという現実も存在する。また、アマゾンの熱帯林を伐採して牧場が拡大してきた

ことも、牧畜の重要性を示唆している。

以上のような3つの経済文化地域を設定することによって、南北アメリカの全体像と地域性を文化地理学の視点から描くことができると筆者は考える。以下ではアメリカ合衆国の発展について、3つの経済文化地域の設定という考察の枠組みから予察的に考察してみたい。

IV 地域変化の文化地理学的解釈

1. アメリカ合衆国の発展

アメリカ合衆国の発展は、従来、大西洋岸に形成された植民地が本国から独立し、領土の拡大と西部開拓によって大陸規模の国家が形成されたというように理解されてきた。このような発展過程は、私が提唱する南北アメリカの3つの経済文化地域という枠組みではどのように解釈できるのだろうか。

アメリカ合衆国の発展は、図2に示されるように、北東4分の1の地域に形成された北西ヨーロッパ系小農経済文化地域が、19世紀後半から南へ、西へ、そして南西へと拡大した過程であると解釈することができる。南北戦争後、南部のプランテーション経済文化地域では綿花プランテーションを基盤とした社会と経済が大きく変化した。一方、連邦政府による開発政策によって西部開発が促進された。アメリカ南西部・中南部はイベリア系牧畜経済文化地域の北端部を構成したが、ここにも北西ヨーロッパ系小農経済文化地域が拡大した。アメリカ北西部はいずれの経済文化地域にも属することのないいわば空白地域であったが、西部開拓の結果として北西ヨーロッパ系小農経済文化地域に組み込まれた。

19世紀のアメリカ合衆国で生じた地域変化は、プランテーション経済文化地域から北西ヨーロッパ系小農経済文化地域への地域変化、イベリア系牧畜経済文化地域から北西ヨーロッパ系小農経済

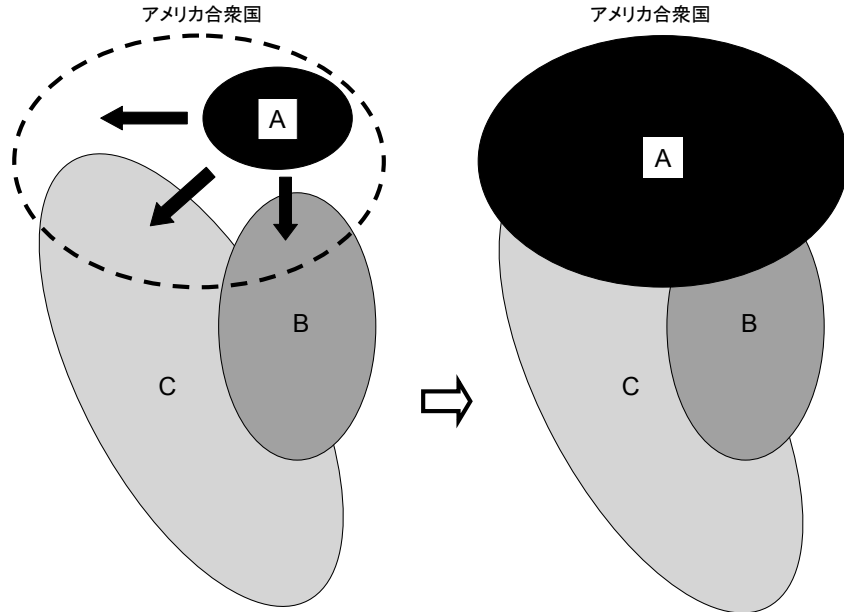


図2 3つの経済文化地域からみたアメリカ合衆国の発展

- A 北西ヨーロッパ系小農経済文化地域
- B プランテーション経済文化地域
- C イベリア系牧畜経済文化地域

文化地域への地域変化、また、未開発地域から北西ヨーロッパ系小農経済文化地域への地域変化という3つのタイプに分類して解釈することができる。この仮説を検証するためには、各地で生じた地域変化に関する詳細な事例研究を蓄積することが必要となる。この作業は今後の課題であるが、以下ではグレートプレーンズ、南カリフォルニア、カリフォルニア・セントラルバレーについて地域変化の概要を例示してみたい。

2. グレートプレーンズ

アメリカ合衆国の中央部には広大な草原が広がる。ミシシッピ川を越えて西に向かうにつれて降水量は減少し、草丈は低くなる。ロッキー山脈の東に広がるグレートプレーンズは半乾燥の草原地帯で、ヨーロッパ人が進出する以前はバッファローなどの大型野生動物を狩猟するアメリカ先住

民の生活様式が確立していた。

グレートプレーンズの大部分は1803年のルイジアナ購入によってフランスからアメリカ合衆国へ領有権が移動した土地であり、連邦政府が管理する公有地となった。19世紀前半には、この半乾燥の草原は「アメリカ大砂漠 Great American Desert」として知られた。土地条件に関する調査が行われて詳細な情報が蓄積される以前は、アメリカ東部の森林地域に暮らす人びとにとって、木の生えていない草原は砂漠であると認識されたためであった。このような環境認識はまさに北西ヨーロッパの森林文化の伝統を受け継いでいた。スペインがこの広大な草原を含む北アメリカ西部を支配下においた時代もあり、牛や馬が導入されて野生化した。スペイン人による恒久的な植民はテキサスに限られていた。ただし、牧畜文化の起源地であるイベリア半島の環境を考えれば、半

乾燥の草原は牛の放牧の適地であり、スペイン人がグレートプレーンズをアメリカ大砂漠と認識することはなかったと推察される。

グレートプレーンズでは、鉄道が東部から西に向かって敷設されたことを契機として、1860年代から1880年代にかけて自由放牧による牧畜経済が形成された。温暖な気候に恵まれたテキサスで繁殖させたテキサスロングホーン牛は、天然の草原に自由放牧され、カウボーイの管理の下で、鉄道駅のある北方のキャトルタウンまでキャトルトレイルに沿って移動された。キャトルタウンで鉄道貨車に積み込まれた牛は東部の大都市まで運搬され、食肉工場で都市住民のために処理された。19世紀後半にグレートプレーンズに形成された牧畜は、イベリア系牧畜の伝統を受け継いではいたが、アメリカ東部の消費経済に組み込まれながら発展したという特徴を持っていた（斎藤・矢ヶ崎，2001）。

西方への開拓が進行する過程で、アメリカ合衆国の農業政策は、18世紀末から小規模家族農場（ファミリーファーム）を育成する方向で展開した。タウンシップレンジ方式の方形測量は小規模な土地の分配のための基盤となった。一般先買権法は不法占拠農民の土地所有権を確立し、ホームステッド法は開拓農民に対して土地を無償で提供した。連邦政府は19世紀にアメリカ西部の公有地を個人や企業に積極的に払い下げた。グレートプレーンズでは、1880年代に開拓民が流入し、土地の販売や賦与が活発化した。鉄道会社が大陸横断鉄道の建設に伴って連邦政府から賦与された土地も開拓民に売却されていった。1880年代には、牛をつれて北方へ移動するカウボーイと定住して農場を営む開拓民との間に摩擦が増大し、いわゆる牧柵戦争が起きたが、この戦いに勝利を取めたのは開拓民であった。こうして、粗放的な牧畜業は北へ、あるいは西へと追いやられ、農民の

領域が拡大した（矢ヶ崎・斎藤・菅野，2006）。

開拓民は芝土の家を造り、浅い地下水をくみ上げるために井戸を掘って風車を立て、有刺鉄線を張った牧柵で農場の周りを囲った。芝土を掘り起こして農地化するために鋼鉄製の犁（プラウ）が開発された。乾燥に強い小麦が乾燥農法によって栽培されたほか、家畜も飼育された。河川に沿った地域では灌漑水路が建設されて灌漑農業も行われるようになった。特にてんさいを栽培して製糖が行われるようになった（矢ヶ崎，2000b）。こうした農業の集約化に伴って、ボルガジャーマンのように、ヨーロッパから新たに移民が流入した。

以上のように、合衆国連邦政府の農業政策、開拓民の流入、草原と乾燥した環境を克服する農業技術の発展に伴って、グレートプレーンズは19世紀末にはカウボーイの世界から小農民の世界へと変化した。これはイベリア系牧畜経済文化地域を大幅に後退させ、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域を拡大する過程であったと解釈できる（図3）。

3. 南カリフォルニア

イベリア系牧畜経済文化地域から北西ヨーロッパ系小農経済文化地域への転換がさらに劇的に展開したのは、スペインによる恒久的な植民開発が行われたカリフォルニアであった。18世紀後半にはカリフォルニア沿岸部でスペイン人による植民が活発化した。アメリカ先住民の教化を目的とした布教集落のミッション、軍事基地のプレシディオ、民間人の入植村プエブロは、いずれもスペイン植民地の北部を開発するためのフロンティア組織であった。さらに、広大な土地がランチョ（牧場）として払い下げられ、牛の放牧と牛皮・牛脂の生産が経済の中心となった。すなわち、スペイン植民地時代の18世紀後半にカリフォルニアはイベリア系牧畜経済文化地域に組み込まれ

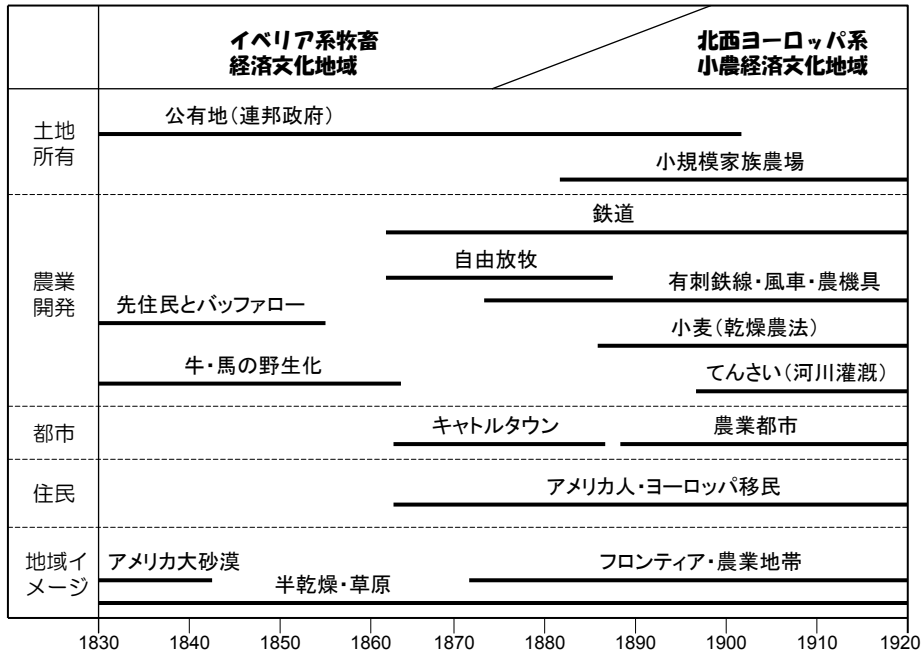


図3 グレートプレーンズの地域変化

た。1820年代にメキシコがスペインから独立しても、イベリア半島の伝統を引き継いだ経済文化地域はそのまま存続した。さらに、米墨戦争の結果として1848年にカリフォルニアはメキシコ領からアメリカ領となったが、19世紀後半までイベリア系牧畜経済文化地域の特徴は維持された。ただし、スペイン人やメキシコ人にとって、カリフォルニアは北アメリカ南西部の他の地域と同様に魅力のない辺境であった。

イベリア半島の伝統を受け継いだカリフォルニアは、19世紀後半から20世紀初頭に著しい地域変化を経験することになった。図4は南カリフォルニアの地域変化の概要を示している。ランチョの賦与によって形成された大土地所有は1880年代まで存続したが、1860年代からランチョが徐々に分割されるようになった。これは粗放的の牧畜から集約的農業への転換を意味した。このような変化を助長したのは、南カリフォルニアの温暖で乾

燥した気候であった。アメリカ領になって間もなく、南カリフォルニアは転地療養の適地としてアメリカ東部で高い評価を受けるようになった。結核やマラリアなどの病因が科学的に解明されていなかった19世紀には、南カリフォルニアは病気を引き起こすとされるミアズマが存在しない健康地であると認識された(矢ヶ崎, 1999; Thompson, 1969; Vance, 1972)。

大陸横断鉄道が開通して南カリフォルニアへの旅行が容易になると、アメリカ東部の裕福な人びとは保養や療養を目的として南カリフォルニアに一時的あるいは恒久的に移住した。結核療養所や保養都市がこうした人びとを吸収した。アメリカ東部から集団で南カリフォルニアに移住する人びとによって、集団入植都市が各地に建設された。灌漑によるブドウやオレンジの栽培も盛んになった。アメリカ式の都市建設も進んだ。1880年代後半にはロサンゼルスを中心に不動産ブームが起

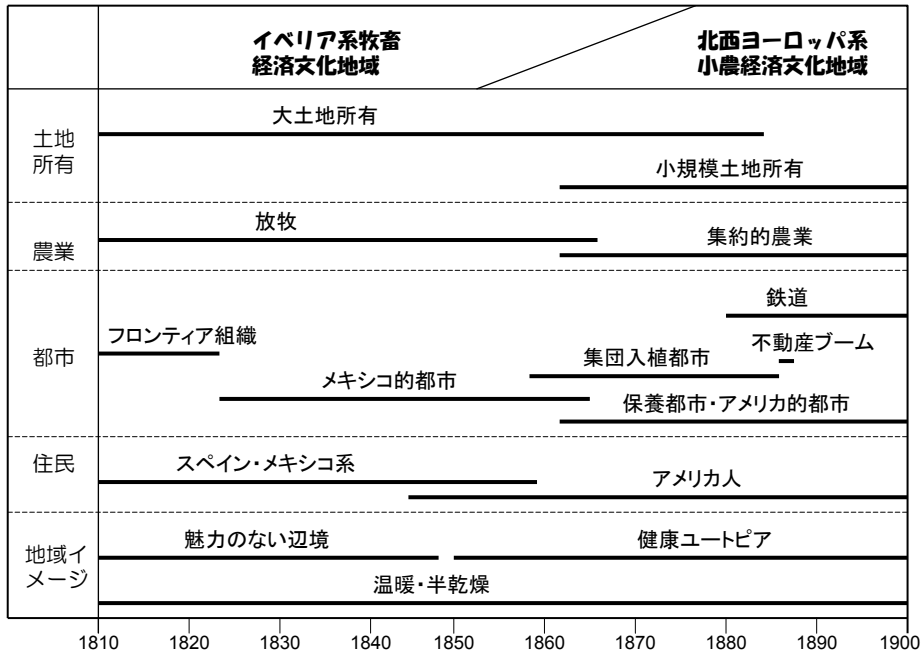


図4 南カリフォルニアの地域変化

き、都市化が促進された。このように、19世紀後半の南カリフォルニアでは、産業活動が活発ではなかったにもかかわらず、恵まれた気候が吸引力となって人口が増加し、都市化が進行した(Yagasaki, 2008)。

スペイン・メキシコ時代に魅力のないフロンティアとして認識されていたカリフォルニアは、19世紀中頃以降、温暖な環境に恵まれた健康ユートピアとして認識されるようになったが、こうした地域認識の変化はイベリア系牧畜経済文化地域から北西ヨーロッパ系小農経済文化地域への移行を象徴するものであった。温暖で乾燥した南カリフォルニアが魅力のない辺境であるという認識は、イベリア半島に起源を持つ。地中海性気候の地域の出身の人びとにとって、カリフォルニアよりも環境の優れた土地はいくらでもあり、文化の中心であったメキシコから遠隔なカリフォルニアはまさに辺境であった。一方、アメリカ北東部の

湿潤で冷涼な気候に暮らす人びとにとって、南カリフォルニアの温暖で乾燥した気候はユートピアそのものであり、北アメリカ大陸を横断してまでも手に入れたい環境であった。アメリカ北東部に移住したのは環境条件の類似した北西ヨーロッパ出身の人びとであり、環境の類似性が新大陸における彼らの植民の成功を促す要因となった。しかし、彼らはよりよい環境を求めて南カリフォルニアに移住した。すなわち、南カリフォルニアを健康ユートピアとして認識する伝統は北西ヨーロッパに起源を持っているのである。

4. カリフォルニア・セントラルバレー

カリフォルニアの中央部に位置するセントラルバレーも19世紀後半までイベリア系牧畜経済文化地域の一部を構成した。南カリフォルニアと同様、この地域でも大土地所有制と放牧が卓越し、魅力のない辺境という地域認識が一般的で

あった。そして19世紀後半から20世紀初頭にかけて北西ヨーロッパ系小農経済文化地域へ変化するが、都市の形態や住民などに関して南カリフォルニアの場合とは異なる地域変化がみられた(図5)。

セントラルバレーでは19世紀末まで大土地所有形態が存続した。これは一部にはスペイン・メキシコ時代のランチョ(大牧場)がアメリカ時代に入っても維持されたためであった。さらに、新興の地主がさまざまな手段で連邦政府や州政府の賦与地を集積し、新たに広大な所有地を私有化した。このような大規模所有地では牛の放牧が行われたが、1849年に始まったゴールドラッシュと人口増加は食肉需要を増大させた。一方、1870年代から1890年代にかけてイギリスのリバプール市場向けの小麦栽培が発展し、放牧地は小麦畑に転換されたが、大規模所有地は維持された。小麦は内陸河川を經由して搬出され、大型船でイギ

リスに輸出された。このような畜産や農業に携わったのはアメリカ人やヨーロッパ系移民であった。

しかし、1880年代からシエラネバダ山脈の雪解け水を利用する水路灌漑事業が行われるようになり、大規模所有地の分割が始まった。1887年カリフォルニア州灌漑地区法(通称、ライト法)のように、小規模所有地の灌漑化を促進する法律の整備も進んだ。こうして各地に灌漑農業コロニーが設立され、灌漑施設の整った小規模な農場が販売された。小規模灌漑農場では、ブドウ、果樹、野菜などの集約的農業や酪農が行われるようになった(矢ヶ崎, 1997)。19世紀末から20世紀初頭にかけての大規模所有地の分割と農業の集約化に伴って、アメリカ人やヨーロッパ系移民が流入した(矢ヶ崎, 1998)。

1869年に開通した大陸横断鉄道とセントラルバレーを南北に走る鉄道は、農業の発展と農業地

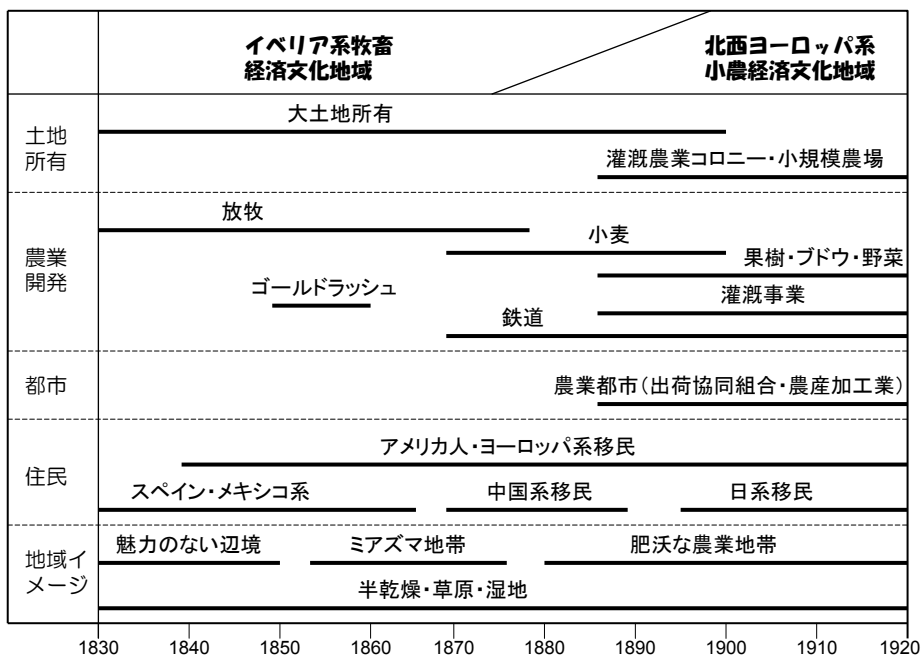


図5 カリフォルニア・セントラルバレーの地域変化

帯の開発を促進する基盤であった。東部市場から遠隔であるという不利益を克服するために、鉄道による合理的な出荷を行うことを目的として作物別の農業協同組合が組織された。また、缶詰やドライフルーツなどを製造する農産加工業が発達した。

集約的農業に必要な低賃金労働力は移民によって供給された。1870年代から1880年代にかけては中国系移民が中心的な役割を演じた。大陸横断鉄道の建設に従事した広東出身の中国人は、鉄道が完成するとセントラルバレーで農業労働に従事するようになった。しかし、中国人排斥運動の激化によって中国系労働者は減少し、中国人に代わって農業労働を担ったのは日系移民であった。このようにアジア系移民労働者は農業の集約化に重要な役割を演じるとともに、人口構成の多様化を促進する要因となった（Yagasaki, 1996; Yagasaki, 2002）。

農業の発達に伴ってセントラルバレーの地域認識は変化した。スペイン・メキシコ時代に魅力のない辺境と認識されていたセントラルバレーは、アメリカ時代に入った当初はミアズマ地帯であると認識された。これは、セントラルバレー中央部には広大な湿地帯が存在し、ハマダラ蚊が繁殖してマラリアが発生するために、ミアズマが支配する不健康地域であると認識されたためであった。しかし、農業地帯の拡大と農業の集約化に伴って、セントラルバレーに対する認識は肥沃な農業地帯へと変化した。

セントラルバレーの場合、アメリカ東部の湿潤冷涼な地域で確立されたコーンベルト方式の農業をそのまま適用することは難しかった。乾燥した環境と東部市場からの距離を克服する必要があった。しかし、19世紀末の地域変化によって形成された農業と農業社会は、アメリカ東部に形成された北西ヨーロッパ系小農経済文化地域の一つの

変形であると理解できる。

V 日系社会の比較研究と経済文化地域

3つの経済文化地域の設定は、南北アメリカを対象とした比較研究に有効である。例えば日系社会の比較研究を事例として考えてみよう。南北アメリカにおける日系移民の活動と日系社会に関しては、地理学研究者による研究が蓄積されてきた。アメリカ合衆国については、矢ヶ崎（2005）の文献目録に日系移民に関する文献が数多く見られるし、杉浦（2001）はアメリカ合衆国における日系移民に関する地理学研究の動向を展望している。地域別にみると、ハワイ、アメリカ太平洋岸地域、ブラジル、パラグアイなど、各地の日系社会に関する研究が多くある（例えば、石川, 1997; 飯田, 2003; 杉浦, 1996, 1998; 矢ヶ崎, 1993; 矢ヶ崎, 1996a, 1996b; Yagasaki, 2003; 矢ヶ崎・斎藤・丸山, 1992; 多田, 1957; Stewart, 1967）。アメリカ合衆国本土、ハワイ、カナダ、そしてブラジルをはじめとするラテンアメリカの日系社会に関する地理学研究の成果は、それぞれの地域に形成された日系社会には類似点とともに相違点が存在することを示唆している。そして日系社会だけでなく、最近の地理学ではグローバルなエスニック問題に関心が高まっている（山下, 2008）。

日系移民によって形成された日系社会に地域差が見られるのはどうしてだろうか。各地の日系社会を比較研究するためにはどのような考察の枠組みが必要であろうか。南北アメリカの日系社会を比較研究するために、3つの経済文化地域は考察の枠組みを提示してくれる。日系移民が異なった国に移住して日系社会を形成した場合を想定して、日系社会とホスト社会との関係を模式的に示したのが図6である。移民集団がホスト社会に生活基盤を確立するために適応戦略が選択され適用される。適応戦略は本国から持ちこまれた文化を

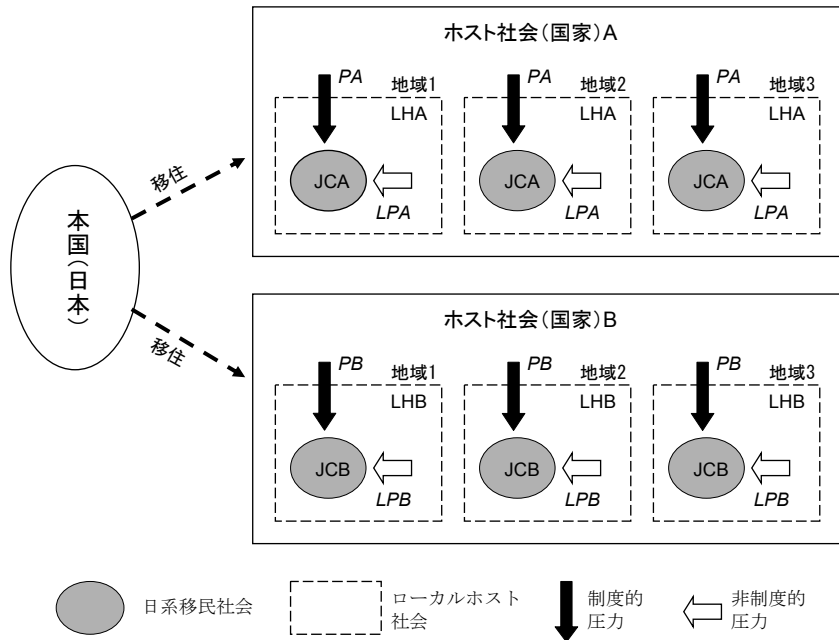


図6 日系移民社会とホスト社会

反映したものである。移民集団とホスト社会が相互作用した結果として、移民集団による空間的住み分けと経済的住み分けが生じる。移民の適応戦略とホスト社会の中に形成された移民社会は、マクロスケールでみれば国や文化圏によって異なるし、ミクロスケールでみればローカルホスト社会によって異なる。

日系移民が移住したホスト社会 A とホスト社会 B を比較すると、社会構造、経済構造、文化的伝統、人種民族構成は同一ではない。したがって、それぞれのホスト社会は日系移民に対して独自の評価を行い、異なる制度的圧力（図 6 の PA と PB）を及ぼす。制度的圧力とは法的差別である。日系移民はホスト社会との対立を回避し摩擦を最小限に抑えるために適応戦略を選択して適用し、ホスト社会の中のある空間を占拠し、経済的基盤を築くように努める。その結果、ホスト社会 A とホスト社会 B には、日系移民が日本から同

一の文化を導入したとしても、異なる日系社会（図 6 の JCA と JCB）が形成されることになる（矢ヶ崎，2003a）。

例えば、アメリカ合衆国のカリフォルニア州とブラジルのサンパウロ州には第二次世界大戦前に多数の日系移民が流入し、集約的農業を基盤とした日系移民社会が形成された。戦前のカリフォルニアでは、日系移民が設立した日系農業協同組合が経済的にも社会的・文化的にも重要な役割を演じた。このエスニック組織は日系移民が採用した適応戦略の一つであった。しかし、第二次世界大戦後、日系農業協同組合のほとんどが消滅し、農業に復帰した日系農業生産者は白人系の農業協同組合に吸収された。一方、第二次世界大戦前のサンパウロでは、日系移民はコーヒー農園における契約農業労働の時代を経て、日系移民は奥地に農地を獲得して集団的な入植事業を行ったり、サンパウロ市の近郊で集約的野菜栽培に従事した。奥

地開発においても大都市近郊においても、共同購入や共同出荷などの経済的目的のために、また日系社会の維持のために、日系農業協同組合が重要な役割を演じた。第二次世界大戦後も日系農業協同組合は存続したが、コチア産業組合のような有力な組織には非日系人も多数加入して大規模化し、ブラジルの農業発展に重要な役割を果たした。つまり、戦前のエスニック農業協同組合はブラジルの組織へと発展した。

以上のように、日系移民の流入にともなってカリフォルニアとサンパウロに農業協同組合の伝統が導入され、これが適応戦略として機能した結果、集約的農業を基盤とした日系社会が発展したが、両地域における展開は大きく異なっていたことが注目される (Yagasaki, 1995)。これは日系移民と農業協同組合を受け入れた二つのホスト社会の構造の差異に起因する。前述のように、カリフォルニアはもともとイベリア系牧畜経済文化地域に属していたが、日系移民が流入した時代には北西ヨーロッパ系小農経済文化地域への地域変化を達成していた。一方、サンパウロはイベリア系牧畜経済文化地域とプランテーション経済文化地域に属していた。南北アメリカの異なる経済文化地域が日系移民を受け入れ、その結果、異なる日系社会が展開したわけである。

サンパウロに流入した日系移民は、小規模農場における野菜・果物の集約的栽培に経済的ニッチを見つけ、ブラジル人と競合することなく経済的基盤を築くことができた。この過程で採用された適応戦略である日系農業協同組合は、粗放的牧畜とプランテーションが支配的であったブラジルでは未発達的方式であったため、戦後の農業発展において日系人は中心的な役割を演じることが可能であった。一方、アメリカ合衆国には、北西ヨーロッパから小農民の伝統が導入された。小規模家族農場から構成される農業地域では農業協同組合

の活動が活発であった。すなわち、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域では、農業形態においても農業協同組合の組織においても、日系移民はアメリカ人と競合せざるを得なかった。第二次世界大戦前の日系移民は、アメリカ人が組織した農業協同組合から排除されたため、自己防衛を目的として日系農業協同組合を組織した。しかし、戦後、アメリカ社会が人種民族の多様性に寛容になると、日系農業協同組合の存在理由が薄れた。このようなホスト社会の変化が、カリフォルニアにおける日系エスニック組織の衰退をもたらす要因となった。

以上のように、マクロスケールでみると、同一の移民集団が形成する移民社会の特徴は、ホスト社会の属性によって異なる。このため、移民社会をホスト社会という地域的枠組みの中で検討することが重要となる。北西ヨーロッパ系小農経済文化地域、プランテーション経済文化地域、イベリア系牧畜経済文化地域はこのような考察の枠組みを提供しており、日系移民社会の詳細な比較研究を実施することは文化地理学の重要な課題である。

一方、同じホスト社会であっても、ローカルホスト社会は地域ごとに社会的経済的条件や人種民族構成の点で異なるため、ミクロスケールの地域差を反映して、日系移民が採用した適応戦略と形成された移民社会は異なる。図6において、ホスト社会Aの3つの地域(地域1~3)に形成された3つの日系社会(JCA)は、ホスト社会からの制度的圧力(PA)を共通して受けると同時に、それぞれのローカルホスト社会(LHA)から異なる非制度的圧力(LPA)を受ける。非制度的圧力とは感情やステレオタイプに基づいた差別や偏見である。人種民族や社会的経済的条件が異なるローカルホスト社会は、日系移民に対して異なる非制度的圧力を及ぼす。ローカルホスト社会にお

いて空間的ニッチと経済的ニッチを確保するために、日系移民は適応戦略を適用し、移民社会を形成した。ローカルホスト社会という地域の枠組みにおいて移民社会を考察することも重要な課題である。

IV まとめ

本稿では、地理学の立場から南北アメリカを理解することを目的として、南北アメリカを対象とした文化地理学研究を概観し、4つのアプローチ、すなわち人間と環境、起源と伝播、地域と景観、時間と変化の重要性を指摘した。そして、コロンブス以降の南北アメリカの全体像を理解するために、北西ヨーロッパ系小農経済文化地域、プランテーション経済文化地域、イベリア系牧畜経済文化地域という3つの経済文化地域を設定する方法を提唱した。さらに、アメリカ合衆国の発展は北西ヨーロッパ系小農経済文化地域が国土の全域に拡大するプロセスであると解釈できることを指摘し、グレートプレーンズ、南カリフォルニア、カリフォルニア・セントラルバレーについて地域変化の概要を例示した。また、3つの経済文化地域の設定は、南北アメリカにおける日系社会を比較研究するための考察の枠組みとして有効であると論じた。

地理学にとって地域を描くこと、すなわち地誌は過去、現在、そして将来も重要な課題である(矢ヶ崎・加賀美・古田, 2007)。ところが、アメリカ合衆国では、計量革命以降、伝統的な地理学は大きく変化してきた。人文主義地理学、マルクス主義地理学、GIS、環境政策など、新しい地理学の波が次々と押し寄せ、そのたびに地域に根ざした地理学の伝統は侵食されてきたようにみえる。アメリカ人の高名で高齢の文化地理学者が、AAG ニュースレター誌で、最近の *Annals of the Association of American Geographers* に掲載され

る論文は地理学的ではないと嘆いたが(Zelinsky, 2006)、私も思わずうなずかざるをえなかった。何が地理学的であるかという議論はさておき、アメリカ合衆国を代表するこの地理学雑誌を見る限り、地理学と他の社会科学との境界はますます不明瞭になり、現実の地域に対する地理学研究者のこだわりは著しく低下してしまったようにみえる。実際、私が本稿で引用した文献には最近のものが多くない。これもアメリカ合衆国の地理学研究者が地域研究への関心を低下させていることに起因していると考えられる。

学際的な地域研究において地理学がアピールできるのは、ミクروسケールの地域に根ざした調査と分析であり、この点で詳細な地域モノグラフを蓄積することは重要である。同時に、地理学が提示できる世界像を広く発信することも重要な課題である。かつて地理学は未知の世界を探検し、新しい情報を本国に持ち帰ることに存在理由があったし、世界の諸地域に関する記載はそれだけで大きな価値を持った。しかし、情報化とグローバル化が急速に進展しつつある現代世界においては、地理的情報を単に集積しただけでは学問としての地理学の存在が疑われる。世界を理解するための枠組みを構築し、地理的事象から世界を読み解く方法を提示することが地理学に期待されているのである。地域に関する研究成果を公表し活発な議論を行う場として、『地理空間』誌の役割に大いに期待したい。

文 献

- 飯田耕二郎 (2003) : 『ハワイ日系人の歴史地理』 ナカニシヤ出版。
 石川友紀 (1997) : 『日本移民の地理学的研究』 榕樹書林。
 斎藤 功・松本栄次・矢ヶ崎典隆編 (1999) : 『ノルデステープラジル北東部の風土と土地利用-』 大明堂。
 斎藤 功・矢ヶ崎典隆 (2001) : テキサスパンハンドル地方における大牧場経営と畜産業-カナディアン川流

- 域を中心として。地学雑誌, **110**, 293-313.
- 杉浦 直 (1996): シアトルにおける日系人コミュニティの空間的展開とエスニック・テリトリーの変容。人文地理, **48**, 1-27.
- 杉浦 直 (1998): 文化・社会空間の生成・変容とシンボル化過程－リトルトーキョーの観察から－。地理学評論, **71A**, 887-910.
- 杉浦 直 (2001): アメリカ合衆国における日系移民集団の地理学的研究－その成果と課題－。移民研究年報, **7**, 115-133.
- 多田文男編 (1957): 『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会.
- 久武哲也 (2000): 『文化地理学の系譜』地人書房.
- 藤原健蔵 (1997): 『地域研究法』総観地理学講座2, 朝倉書店.
- 丸山浩明 (2000): 『砂漠化と貧困の人間性－ブラジル奥地の文化生態－』古今書院.
- 村山祐司編 (2003): 『地域研究』シリーズ人文地理学2, 朝倉書店.
- 矢ヶ崎典隆 (1993): 『移民農業－カリフォルニアの日本人移民社会－』古今書院.
- 矢ヶ崎典隆 (1995): 南北アメリカにおける先住民の農業様式と地域生態。横浜国立大学人文紀要第一類, **41**, 41-65.
- 矢ヶ崎典隆 (1996a): カリフォルニア州ターラック地域における日本人移民の植民活動と移民社会。地理学評論, **69A**, 670-692.
- 矢ヶ崎典隆 (1996b): カリフォルニア州サンホアキンバレー北部の日系計画植民地。横浜国立大学人文紀要第一類, **42**, 41-58.
- 矢ヶ崎典隆 (1997): 合衆国センサスに描かれた19世紀末の灌漑フロンティア。横浜国立大学人文紀要第一類, **43**, 37-52.
- 矢ヶ崎典隆 (1998): カリフォルニア州サンホアキンバレー北部におけるスウェーデン人の入植過程。横浜国立大学教育人間科学部紀要, **1**, 75-89.
- 矢ヶ崎典隆 (1999): 19世紀におけるカリフォルニアのイメージと地域性。学芸地理, **54**, 2-20.
- 矢ヶ崎典隆 (2000a): アメリカ地理学と地域研究－日本人にとっての研究フロンティア－。東京学芸大学紀要第3部門社会科学, **51**, 77-89.
- 矢ヶ崎典隆 (2000b): アメリカ合衆国アーカンザス川流域の甜菜糖産業。歴史地理学, **42(4)**, 1-22.
- 矢ヶ崎典隆 (2003a): カリフォルニアにおける日系移民の適応戦略と居住空間。歴史地理学, **45(1)**, 57-71.
- 矢ヶ崎典隆 (2003b): アメリカ地域研究と地理学－フィールドワークによる地域理解－。東京学芸大学紀要第3部門社会科学, **54**, 75-87.
- 矢ヶ崎典隆 (2004a): 移民現象の地理学研究における「前適応」概念の適用。東京学芸大学紀要第3部門社会科学, **55**, 49-53.
- 矢ヶ崎典隆 (2004b): 砂糖・牛・丸太小屋－南北アメリカ地誌への歴史地理学的アプローチ－。2004年度人文地理学会大会研究発表要旨, 20-23.
- 矢ヶ崎典隆 (2005): 日本の地理学研究者によるアメリカ研究－文献目録－。東京学芸大学紀要第3部門社会科学, **56**, 51-63.
- 矢ヶ崎典隆 (2006): アメリカ合衆国の地域性と地域区分。新地理, **54(3)**, 15-32.
- 矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・古田悦造編 (2007): 『地誌学概論』朝倉書店.
- 矢ヶ崎典隆・斎藤 功 (1992): ブラジル北東部ゴイアナ川流域における製糖工場の展開とサトウキビ集荷圏の空間組織。地理学評論, **61A**, 17-39.
- 矢ヶ崎典隆・斎藤 功・菅野峰明編 (2006): 『アメリカ大平原－食糧基地の形成と持続性－(増補版)』日本地理学会海外地域研究叢書3, 古今書院.
- 矢ヶ崎典隆・斎藤 功・丸山浩明 (1992): ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における日系人農業の発展とその影響。横浜国立大学人文紀要第一類, **38**, 77-106.
- 山下清海編 (2008) 『エスニック・ワールド－世界と日本のエスニック社会－』明石書店.
- Areola, D. D. ed. (2004): *Hispanic Spaces, Latino Places: Community and Cultural Diversity in Contemporary America*. University of Texas Press.
- Barrows, H. H. (1910): *Geography of the Middle Illinois Valley*. Illinois State Geological Survey, Bulletin No. 15, University of Illinois, Urbana.
- Blouet, B. W. (1981): *The Origins of Academic Geography in the United States*. Archon Books.
- Bowman, I. (1916): *The Andes of Southern Peru: Geographical Reconnaissance along the Seventy-Three Meridian*. Henry Holt & Co.
- Bowman, I. (1924): *Desert Trails of Atacama*. American Geographical Society.
- Butzer, K. W. (1992): The Americas before and after 1492: Current Geographical Research. *Annals of the Association of American Geographers*, **82**, 343-568.
- Carney, J. A. (2001): *Black Rice: The African Origins of Rice Cultivation in the Americas*. Harvard University Press.
- Clark, A. H. (1968): *Acadia: The Geography of Early*

- Nova Scotia to 1760*. University of Wisconsin Press.
- Crosby, A. W. Jr. (1972) : *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*. Greenwood Pub. Co.
- Denevan, W. M. (1966) : *The Aboriginal Cultural Geography of the Llanos de Mojos of Bolivia*. Ibero-Americana, 48. University of California Press.
- Denevan, W. M. ed. (1989) : *Hispanic Lands and Peoples: Selected Writings of James J. Parsons*. Westview Press.
- Denevan, W. M. ed. (1992a) : *The Native Population of the Americas in 1492. Second Edition*. University of Wisconsin Press.
- Denevan, W. M. (1992b) : The Pristine Myth: The Landscape of the Americas in 1492. *Annals of the Association of American Geographers*, 82, 369-385.
- Dohrs, F. E. and Sommers, L. M. (1967) : *Cultural Geography: Selected Readings*. Thomas Y. Crowell Co.
- Gaile, G. L. and Willmott, E. J. eds. (2003) : *Geography in America at the Dawn of the 21st Century*. Oxford University Press.
- Galloway, J. H. (1989) : *The Sugar Cane Industry: An Historical Geography from its Origins to 1914*. Cambridge University Press.
- Gibson, J. R. (1976) : *Russia in Frontier America: The Changing Geography of Supply of Russian America, 1784-1867*. Oxford University Press.
- Gibson, J. R. (1978) : *European Settlement and Development in North America: Essays on Geographic Change in Honour and Memory of Andrew Hill Clark*. University of Toronto Press.
- Gumprecht, B. (1999) : *The Los Angeles River: Its Life, Dearth, and Possible Rebirth*. The Johns Hopkins University Press.
- Harris, R. C. and Warkentin, J. (1974) : *Canada before Confederation: A Study in Historical Geography*. Oxford University Press.
- Hart, J. F. (1975) : *The Look of the Land*. Prentice-Hall.
- Hart, J. F. (1998) : *The Rural Landscape*. The Johns Hopkins University Press.
- Hart, J. F. (2003) : *The Changing Scale of American Agriculture*. University of Virginia Press.
- Hewes, L. (1973) : *The Suitcase Farming Frontier: A Study in the Historical Geography of the Central Great Plains*. University of Nebraska Press.
- Hewes, L. (1981) : Early Fencing on the Western Martin of the Prairie. *Annals of the Association of American Geographers*, 71, 499-526.
- Hewes, L. and Jung, C. L. (1981) : Early Fencing on the Middle Western Prairie. *Annals of the Association of American Geographers*, 71, 177-201.
- Hudson, J. C. ed. (1979) : Seventy-Five Years of American Geography. *Annals of the Association of American Geographers*, 69, 1-185.
- Hudson, J. C. (1994) : *The Making Corn Belt: A Geographic History of Middle-Western Agriculture*. Indiana University Press.
- Hudson, J. C. (2002) : *Across the Land: A Regional Geography of the United States and Canada*. The Johns Hopkins University Press.
- James, P. E. (1942) : *Latin America*. The Bobbs-Merrill Company.
- James, P. E. and Jones, C. F. eds. (1954) : *American Geography, Inventory and Prospect*. Syracuse University Press.
- James, P. E. and Martin, G. J. (1978) : *The Association of American Geographers: The First Seventy-Five Years 1904-1979*. Association of American Geographers.
- Johnson, H. B. (1976) : *Order upon the Land: The U.S. Rectangular Survey and the Upper Mississippi Country*. Oxford University Press.
- Jordan, T. G. (1966) : *German Seed in Texas Soil: Immigrant Farmers in Nineteenth-century Texas*. University of Texas Press.
- Jordan, T. G. (1985) : *American Log Buildings: An Old World Heritage*. The University of North Carolina Press.
- Jordan, T. G. (1989) : Preadaptation and European Colonization in Rural North America. *Annals of the Association of American Geographers*, 79, 489-500.
- Jordan, T. G. (1993) : *North American Cattle-Ranching Frontiers: Origins, Diffusion, and Differentiation*. University of New Mexico Press.
- Jordan, T. G. and Kaups, M. (1989) : *The American Backwoods Frontier: An Ethnic and Ecological Interpretation*. The Johns Hopkins University Press.
- Kenzer, M. S. (1987) : *Carl O. Sauer: A Tribute*. Oregon State University Press.
- Kniffen, F. B. (1965) : Folk Housing: Key to Diffusion. *Annals of the Association of American Geographers*, 55, 549-577.
- Leighly, J. ed. (1963) : *Land and Life: A Selection from the Writings of Carl Ortwin Sauer*. University of

- California Press.
- Lemon, J. T. (1972) : *The Best Poor Man's Country: A Geographical Study of Early Southeastern Pennsylvania*. The Johns Hopkins University Press.
- Ley, D. and Samuels, M. S. eds. (1978) : *Humanistic Geography: Prospects and Problems*. Maaroufa Press.
- Marsh, G. P. (1864) : *Man and Nature, or, Physical Geography as Modified by Human Action*. C. Scribner.
- McManis, D. R. (1975) : *Colonial New England: A Historical Geography*. Oxford University Press.
- Meinig, D. W. (1965) : The Mormon Culture Region: Strategies and Patterns in the Geography of the American West. *Annals of the Association of American Geographers*, **55**, 191-220.
- Meinig, D. W. (1968) : *The Great Columbia Plain: A Historical Geography, 1850-1910*. University of Washington Press.
- Meinig, D. W. (1969) : *Imperial Texas: An Interpretive Essay in Cultural Geography*. University of Texas Press.
- Meinig, D. W. (1971) : *Southwest: Three Peoples in Geographical Change, 1600-1970*. Oxford University Press.
- Meinig, D. W. (1986) : *The Shaping of America: A Geographical Perspective on 500 Years of History, Volume 1, Atlantic America, 1492-1800*. Yale University Press.
- Meinig, D. W. (1993) : *The Shaping of America: A Geographical Perspective on 500 Years of History, Volume 2, Continental America, 1800-1867*. Yale University Press.
- Meinig, D. W. (1998) : *The Shaping of America: A Geographical Perspective on 500 Years of History, Volume 3, Transcontinental America, 1850-1915*. Yale University Press.
- Mikesell, M. W. ed. (1973) : *Geographers Abroad: Essays on the Problems and Prospects of Research in Foreign Areas*. The University of Chicago, Department of Geography Research Paper No. 152. The University of Chicago Press.
- Mitchell, R. D. and Groves, P. A. (1987) : *North America: The Historical Geography of a Changing Continent*. Rowman and Littlefield.
- Pan American Union (1959) : *Plantation Systems of the New World: Papers and Discussion Summaries of the Seminar held in San Juan, Puerto Rico*. Pan American Union.
- Parsons, J. J. (1964) : The Contribution of Geography to Latin American Studies. In *Social Science Research on Latin America*, ed. C. Wagley, 33-85. Columbia University Press.
- Parsons, J. J. (1968) : *Antioqueno Colonization in Western Colombia*. University of California Press.
- Parsons, J. J. (1969) : Ridged Fields in the Rio Guayas Valley, Ecuador. *American Antiquity*, **34**, 76-80.
- Parsons, J. J. (1972) : Spread of African Pasture Grasses to the American Tropics. *Journal of Range Management*, **25**, 12-17.
- Parsons, J. J. (1973) : Latin America. In *Geographers Abroad: Essays on the Problems and Prospects of Research in Foreign Areas*, ed. M. Mikesell, 16-46. The University of Chicago, Department of Geography Research Paper No. 152. The University of Chicago Press.
- Parsons, J. J. (1977) : Geography as Exploration and Discovery. *Annals of the Association of American Geographers*, **67**, 1-25.
- Parsons, J. J. (1983) : The Migration of Canary Islanders to the Americas: An Unbroken Current since Columbus. *The Americas*, **39**, 447-481.
- Parsons, J. J. and Bowen, W. A. (1966) : Ancient Ridged Fields of the San Jorge River Floodplain, Colombia. *Geographical Review*, **56**, 317-343.
- Parsons, J. J. and Vonnegut, N. eds. (1983) : *60 Years of Berkeley Geography 1923-1983, Bio-Bibliographies of 159 Ph.D.'s Granted by the University of California, Berkeley, since the Establishment of a Doctoral Program in Geography in 1923*. Supplement to The Itinerant Geographer, Berkeley, California.
- Pattison, W. D. (1964) : *Beginnings of the American Rectangular Land Survey System, 1784-1800*. The University of Chicago, Department of Geography Research Paper No. 50. The University of Chicago Press.
- Powell, J. W. (1895) : *Canyons of Colorado*. Flood and Vincent.
- Raup, H. F. (1932) : The German Colonization of Anaheim, California. *University of California Publication in Geography*, **6**, 123-146.
- Rundstrom, R. A. and Kenzer, M. S. (1989) : The Decline of Fieldwork in Human Geography. *Professional Geographer*, **41**, 294-303.
- Sauer, C. O. (1916) : *Geography of the Upper Illinois*

- Valley and History of Development*. Illinois State Geological Survey, Bulletin No. 27, University of Illinois, Urbana.
- Sauer, C. O. (1927) : *Geography of the Pennyroyal: A Study of the Influence of Geology and Physiography upon the Industry, Commerce and Life of the People*. The Kentucky Geological Survey.
- Sauer, C. O. (1930) : Historical Geography and the Western Frontier. In *the Trans-Mississippi West*, ed. J. F. Willard and C. B. Goodykoontz, 267-289. University of Colorado Press.
- Sauer, C. O. (1941a) : The Settlement of the Humid East. In *Climate and Man (1941 Yearbook of Agriculture, United State Department of Agriculture)*, 157-166. Government Printing Office.
- Sauer, C. O. (1941b) : Foreword to Historical Geography. *Annals of the Association of American Geographers*, **31**, 1-24.
- Sauer, C. O. (1952) : *Agricultural Origins and Dispersals*. The American Geographical Society.
- Sauer, C. O. (1966) : *The Early Spanish Main*. University of California Press.
- Sauer, C. O. (1971) : *Sixteenth Century North America: The Land and the People as seen by the Europeans*. University of California Press.
- Sauer, C. O. (1974) : The Forth Dimension of Geography. *Annals of the Association of American Geographers*, **64**, 189-192.
- Sauer, C. O. (1980) : *Seventeenth Century North America*. Turtle Island Foundation.
- Sauer, C. O. (1981) : *Selected Essays 1963-1975*. Berkeley: Turtle Island Foundation.
- Shortridge, J. R. (1987) : Changing Usage of Four American Regional Labels. *Annals of the Association of American Geographers*, **77**, 325-336.
- Shortridge, J. R. (1995) : *Peopling the Plains: Who Settled Where in Frontier Kansas*. University Press of Kansas.
- Spencer, J. E. and Horvath, R. (1963) : How does an Agricultural Region Originate? *Annals of the Association of American Geographers*, **53**, 74-92.
- Stanislawski, D. (1946) : The Origin and Spread of the Grid-Pattern Town. *Geographical Review*, **36**, 105-120.
- Staniskawski, D. (1947) : Early Spanish Town Planning in the New World. *Geographical Review*, **37**, 94-105.
- Stewart, N. R. (1967) : *Japanese Colonization in Eastern Paraguay*. National Academy of Science.
- Thomas, W. L. Jr. ed. (1956) : *Man's Role in Changing the Face of the Earth*. The University of Chicago Press.
- Thompson, K. (1969) : Insalubrious California: Perception and Reality. *Annals of the Association of American Geographers*, **59**, 50-64.
- Vance, J. E. Jr. (1972) : California and the Search for the Ideal. *Annals of the Association of American Geographers*, **62**, 185-210.
- Wagner, P. L. and Mikesell, M. W. eds. (1962) : *Readings in Cultural Geography*. The University of Chicago Press.
- Ward, D. (1971) : *Cities and Immigrants: A Geography of Change in Nineteenth-Century America*. Oxford University Press.
- Ward, D. (1989) : *Poverty, Ethnicity, and the American City, 1840-1925: Changing Conceptions of the Slum and the Ghetto*. Cambridge University Press.
- West, R. C. (1949) : *The Mining Community in Northern New Spain: The Parral Mining District*. Ibero-Americana, 30. University of California Press.
- West, R. C. and Augelli, J. P. (1976) : *Middle America: Its Lands and Peoples, second edition*. Prentice-Hall.
- Williams, M. (1989) : *Americans and their Forests: A Historical Geography*. Cambridge University Press.
- Yagasaki, N. (1995) : Ethnic Agricultural Cooperatives as Adaptive Strategies in Japanese Overseas Communities: Diffusion, Development and Adaptation in Contextual Perspective. *Geographical Review of Japan*, **68B**, 119-136.
- Yagasaki, N. (1996) : Japanese Immigrants and the Sustainability of Ethnic Settlements in California's Irrigation Frontier. In *Geographical Perspectives on Sustainable Rural Systems: Proceedings of the Tsukuba International Conference on the Sustainability of Rural Systems*, ed. H. Sasaki, I. Saito, A. Tabayashi, and T. Morimoto, 417-425. Kaisei Publications.
- Yagasaki, N. (2002) : Spatial Organization of Japanese Immigrant Communities: Spontaneous Settlements and Planned Colonies in the Northern San Joaquin Valley, California. *The Japanese Journal of American Studies*, **13**, 45-62.
- Yagasaki, N. (2003) : Adaptive Strategies of Japanese Immigrants and Occupational Sequent Occupance

- in the Development of Fresh Produce Marketing in Los Angeles. *Geographical Review of Japan English Edition*, **76**, 894-909.
- Yagasaki, N. (2008) : Origins of Cities and Urbanization in Nineteenth-Century Southern California: Regional Changes in the Context of Three Economic-Cultural Regions of the Americas. *The Japanese Journal of American Studies*, **19** (印刷中).
- Zelinsky, W. (1961) : An Approach to the Religious Geography of the United States. *Annals of the Association of American Geographers*, **51**, 139-193.
- Zelinsky, W. (1980) : North America's Vernacular Regions. *Annals of the Association of American Geographers*, **70**, 1-16.
- Zelinsky, W. (1988) : *Nations into State: The Shifting Symbolic Foundations of American Nationalism*. University of North Carolina Press.
- Zelinsky, W. (1992) : *The Cultural Geography of the United States. Revised edition*. Prentice-Hall.
- Zelinsky, W. (2006) : How Geographic are our Geographic Journals? *AAG Newsletter*, **41**(3), 14.
- Zimmerer, K. S. (1996) : *Changing Fortunes: Biodiversity and Peasant Livelihood in the Peruvian Andes*. University of California Press.

Cultural Geography and the Studies of the Americas:

Proposal of Three Economic-Cultural Regions and the Interpretation of Regional Changes

YAGASAKI Noritaka

Department of Geography, Tokyo Gakugei University

The Americas have changed since the arrival of Columbus, and interpreting these changes is a challenging task for geographers. This paper attempts to propose the framework for investigating the overall development and the regional characteristics of the Americas from the cultural-geographic viewpoint. An examination of geographers' published works reveals that four approaches are important in scrutinizing the Americas as a whole: "man and nature," which emphasizes the human impact on the environment; "origin and dispersal," which examines transcontinental exchange and its impact; "region and landscape," which identifies culture regions and cultural landscapes; and "time and change," which depicts the process of regional changes. Three economic-cultural regions are then identified; these regions emerged with the introduction of different systems of development from Europe. The three regions are the northwestern European peasant economic-cultural region, plantation economic-cultural region, and Iberian cattle ranching economic-cultural region. The development of the United States is interpreted in the context of the three economic-cultural regions as a process in which the northwestern European peasant economic-cultural region expanded to the south, west, and southwest, eventually expanding across the entire territory. In order to substantiate this thesis, the cases of the Great Plains, southern California, and California's Central Valley are presented with reference to the regional changes that took place in the late nineteenth century. The proposed economic-cultural regions also provide the basis for comparative studies of immigrant communities in the Americas, as the differences in the Japanese immigrant communities are successfully interpreted in the context of the host society inherent in the economic-cultural regions.

Key words: the Americas, area studies, cultural geography, economic-cultural region, Japanese immigrants